

無限の宇宙と守護の盾

黒三葉サンダー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは偶々、本当に偶然ISの声が聞こえてしまう少年の物語。

目次

これが僕とこの子の出会い	1
ちよつとした賢者タイム	6
入学試験	8
気紛れ兔の遊び	12
入学初日	15
クラス代表のいざこざ	19
V S ブルー・ティアーズ　くその手に盾を、覚悟を胸にく	22
クラス代表決定戦、その結末	30
新しい力、心に潜む何か	32
中国からの使者	37
打鉄の独白	40
お転婆少女はセカンド幼馴染み？	43
ちよつとした騒動、傷付いた心	50
V S 甲龍　一夏の苦戦	53
V S Unknown　く燃え羽ばたく不死鳥く	58
その後の結末	64
打……鉄……？	66
3つの問題、早すぎる疑い	71
???	73
発覚	75
対話	79
報告と考察	83
それぞれの想い、迷い、不安	85
その手を伸ばせば	91

これが僕とこの子の出会い

真っ白な病室でよくわからない薬品の匂いが漂う中、自分よりも大きくて逞しい手を懸命に握る。

何度も何度も早く治れと祈った。千羽鶴だって頑張って折った。お医者さんにも何度も何度もお願いした。

けれど父さんの病気が治る様子は微塵もなかった。点滴を刺されて、呼吸器をつけられて、お医者さんや看護婦さんが一生懸命父さんを治そうと頑張って。

でも、それでも父さんは逝ってしまった。あまりにも簡単に、まるで静かに眠るように。

その姿を見て母さんは力無く床に座り込んでしまわずと泣いていた。

自分もずっと涙が止まらなかった。

「父さん…ぼく頑張るよ……ぼくが母さんを守るから……」

「……久しぶりに見たな」

零れ落ちる涙を拭って、体を起こす。きつと先週父さんの墓参りに行ったから見てしまったのかも。

体を伸ばすとそこら中からパキパキと小気味いい音が聞こえる。

ベッドから降りてカーテンを開けると眩い太陽の光が窓から差し込む。絶好の受験日和だ。

今日は藍越学園の受験日だ。この学園の卒業生の就職率は極めて高く、安定した職につけるのが特徴だ。

うちは母子家庭なので少しでも母さんに楽をさせてあげたいからこの学園を受けることにした。藍越学園を卒業して安定した職につき母さんに楽をさせる。これが僕の当面の目標だ。

リビングで母さんに「おはよう」と言ってから洗面所へ向かい顔を洗う。冬のひんやりとした冷たさが眠気を吹き飛ばし、バツチリ目が

覚めた。

その後は朝御飯を食べながら母さんと他愛ない話や試験を応援してもらい、気分は上々。忘れ物はないし頭も冴えてる。コンディションは調っている。

出発する前に父さんに線香を立てて手を合わせる。

(父さん。僕頑張って合格してくるから、そっちで見守っててください)
い)

最後に父さんの遺影を見てから、頬を叩いて気を引き締める。

「よし！行ってきます！合格してくるから！」

「行ってらっしゃい！雪道に気を付けてね！頑張るのよ！」

玄関にいる母さんに手を振って家を後にする。藍越学園へは一度下見に行っているので場所はしつかり分かっている。それに今日は早めに出てきたので充分間に合う。

目指すは一発合格だ！

ISと呼ばれるこのパスワードスーツは『篠ノ之 東』博士によって作られた特殊なパスワードスーツらしく、数年前に突如飛来してきた沢山のミサイルを『白騎士』と名付けられたISが全て撃墜した事件が発生した。これを期に世界中にISという存在が認知されていたらしい。

残念ながら詳しくは知らないのでニュースで得た情報くらいしかない。それとISは何故か女性しか動かせないという欠陥を孕んでいるらしい。

でもそのせいで圧倒的軍事力を持つISを動かせる女性のほうが男性よりも強くて偉いという風潮が流れ始めてしまい、今では男尊女卑ではなく女尊男卑な世界になってしまっている。

長々と説明してしまっただけで、では何故か女性しか動かせないはずのISの起動検査を男性で行っているのかに移ろう。

これにも実は訳がある。それというのも、先程男子学生がISに触れて動かしてしまったという世界仰天なビツクニュースが起きてしまったらしい。

女性専用と言っても間違いないISを男性が動かしてしまった以上、もしかすると他にもISを動かせる男性がいるかもしれない。ということと急遽世界中で男性による起動検査が行われているのだ。

無論僕もその対象に入ってしまった為にこうして列に並んでいる。本当はすぐにでも帰って休みたいんだけど、どうあがいても返してくれなさそうなのでさっさと終わらせてしまいたい。

『……パパ……どう……』

「えっ？」

なんだ？今女の子の声が聞こえたような？

キョロキョロと辺りを見回してみるが、それらしい声の主は見当たらない。パパと言っていたし、子供かと思っただけでもそんな場所に子供が、しかも女の子が来るわけではないか。

「……の人！次の人！」

「あっ！はい！すいません！」

っといけない。呼ばれていたのに全く気付かなかった。

女性職員の人の目も少しキツくなってるし、すぐに終わらせよう。目の前に鎮座しているIS（打鉄だったはず）に手を伸ばして触れる。

（どうせ動くことはないだろうし——）

『——パパ！見つけた！』

「っ!?!今のは——」

先程の子供の声が聞こえたと思いきや、いきなり視界に無数の意味不明な文章や数式が流れてくる。

これは………機体情報？

って!!?

「う、嘘だ………」

「ふ——」

周りの人達が一様に驚愕しており、僕はふと体を見てみるとそこにはIS——打鉄の装甲が展開されていた。

僕は自分に起こった事に呆然とし、女性職員の人が口を震わせながら事実を突き付けてくる。

「二人目えええええ!!?」

拜啓、天国のお父様へ。

どうやら僕はまともな人生は歩めないみたいです。

『パパ♪パパ♪』

何処からともなく聞こえてくる（恐らく打鉄から）楽しげな声と慌

てふためく周りを見て、逆に冷静になってきた。

「どうすればいいんだろ、これ……………」

何となく打鉄を撫でながら、今後の事に想いを馳せる。

「……………藍越学園に進学出来ればいいなあ

ちよつとした賢者タイム

結論から言おう。僕は藍越学園に入学することは出来なかった。

点数は合格点ラインを突発してたし、面接の評価も文句なし。晴れて藍越学園の生徒として学生生活を謳歌——なんてことは勿論無かった。

それは一重に女性しか動かせないはずのパスワードスーツ、ISを動かせてしまったからだ。

結果僕は二人目のIS操縦者としてIS学園へと編入しなければならなかった。

初めは藍越学園に通いたい旨を訴えたが、政府からの脅しに屈して泣く泣く藍越学園を諦める事になった。

だって実験台とかなりたくないし……。IS学園にいる間は安全だということ僕じゃなくて母さんが乗り気になってしまった。

拳げ句——

「良かったじゃない！ずっと衛から色恋沙汰の話の間かなかったし、丁度良い機会だわ！頑張ってね！」

——とのことだ。逞しすぎやしないだろうか。

ともかくにも、IS学園でも卒業後の就職先は中々条件が良いらしいので無事に卒業して稼ぎたいと思う。

「はあ……どうしてこうなったんだろうなあ」

ベッドで寝転がり右手小指にある鈍色の指輪を眺めながら溜め息を溢す。

因みにこの指輪は打鉄だ。何でも待機状態っていうモードみたいで、何故か僕から離れようとしんない。

外せても起動することが出来ないらしく、もう殆ど僕専用になってしまっているらしい。頭の痛くなる話だった。

とりあえず今は今後について考えよう。

IS学園。文字通りISについてを学ぶ大規模な学園で、各国から学びに来る学生がいるほどの有名学園。ISを使った機動練習や整備など、IS専門の工業高校と考えるべきか。問題としては僕は全く

と行って良いほどISの事を知らない。その時点で勉強に追い付くのは至難だろう。

けれど一番の問題はそこじゃない。僕が危惧しているのは……
「女子校、みたいなものだよなあ……」

ISは女性しか動かせない。そのISを学ぶ学園、すなわち女子しかない学園なのだ。母さんが言ってたこともこれに由来する。

因みに何故僕がここまで危惧しているのか。それは単純に免疫が無いからだ。

ずっと勉強とかに必死だったから異性と楽しく話したり、まして一緒に遊ぶなんていうリア充イベントなど経験している訳はない。

そもそも男友達ですらほぼ皆無なのだ。女友達などいるわけもなく、今頃になって危機感を感じている。

(まあ男子は僕の他にも一人いるみたいだし、そこまで悲観するほどでも無いのかな?)

指輪を眺めるのを止めて勢いよく起き上がり、近くに置いてある分厚い教科書を手取る。

これは学園側から渡された物で、ISについて色々と詳しく書いてある教本だ。辞書くらいの厚さはあると思う。

「……なんにせよ、勉強しないことには始まらないよな。よし！ちやちやつと読んでしまおう！」

こうして僕は机にかじりついて本の中身を熟読していくのだった。

入学試験

流石に今回は無理だ。

今、僕の目の前にいるのはISに身を包んだ試験官。対して僕も打鉄を展開しているけど、相手の威圧感が半端ではない。

僕は現在IS学園に入学するための試験を受けている。

何でもISの適性検査みたいなものらしい。そもそも僕やもう一人の男子学生は貴重な男性操縦者になるからIS学園への入学はほぼ確定らしい。

どうしてそんなことを知っているのかと疑問に思う人もいると思う。僕は実際は教えてもらった側だ。

世にも奇妙な姿をしたウサギ耳のお姉さんに親切に教えてもらったのだ。今度会ったときには是非お礼を言わなければならない。

まあ最後に聞かれた質問の意図は未だに分からないけど。

「それでは試験を始めます。リラックスして、されど緊張感を持って試験を受けるように」

「は、はいー」

初めてISを動かすのにリラックスしろっていうのは無理だと思います。というか無茶ぶりだと思います。

試験官のISは……確かラファールという名前だった気がする。打鉄とは違って豊富な武器があり、拡張領域（四次元ポケットみたいなもの）も打鉄よりも多い、だったかな。動かしやすくて軍でも主力として扱っている……って書いてたような気がする。

兎に角打鉄よりも取れる選択肢が多い以上こっちが戦いの主導権を握るのはキツイ——いや、そもそも相手は試験官でこっちはずぶの素人だ。そもそも主導権なんて握れる筈がない。

それに僕は剣を振るう気はないのだから。

「それでは始めー」

「っー」

試験官が持っていたアサルトライフルが火を吹く。それを何とか

両肩のシールドで防ぐけど、流石に全て防げる訳ではない。特に下半身を狙った弾丸はシールドをすり抜けて被弾している。

弾丸のダメージはSEが受け止めてくれているから痛みはないけど、少しずつ確実にSEが削られているのは事実だ。ISの戦闘においてSEの涸渇はそのまま敗北を意味する。流石に試験官相手に勝てるとは思ってないし、勝とうとも思っていない。けどやられっぱなしなものも気持ちいいものではないのは確かだ。

今後ISを動かせるタイミングは限られてくるだろうし、この際に色々と経験しておきたいのが本音だ。

未だに撃ち止まない弾丸の雨を右手でシールドを持って上半身を防ぎ、左手で持ったシールドで下半身を防ぐ。

そのまま受けると衝撃でシールドが持つていかれそうになるので、角度をつけて受け止める。

すると先程までのビリビリとした感覚が弱まり、被弾も徐々に少なくなってきた……気がする。

けれど相手は棒立ちになって射撃を続けるような兵器じゃない。素早く移動しながら射角を変えて撃ってくるのを何とか防ごうとするが、やはり操作技術に差がありすぎる。段々と被弾率が上がってきているのが分かる。

『パパー！パパー！攻撃！』

「っ！駄目だ！」

打鉄から攻撃するよう催促されるけど、それを容赦なく切り捨てる。

例えばこれがスポーツとして人気なのだとしても、紛れもなく僕たちが使っているのは人を軽く殺せる兵器なのだ。打鉄に備わっている刀も例外ではない。

残念ながら僕はそんな簡単に人を殺せる凶器を遊び感覚で振るえるほど図太い性格はしていない。

例えば絶対防衛という操縦者の命を守るシステムがあったとしてもだ。

『パパー!!』

「だい——じょうぶ！」

凄いスピードで背後に回ったラファールを追うように反転して咄嗟に左右のシールドを構える。

試験官が手に持っていたのは先程のアサルトライフルではなく、散弾銃——シヨットガンだった。

「ぐっ！うああ!!」

『パパ!?!』

至近距離で放たれたそれは意図も容易く左右のシールドを弾き飛ばし、もろに弾丸を受けてしまう。その衝撃はアサルトライフルの比では無かった。

「どうした！何故剣を抜かない！」

「抜きたくないから、ですよ……」

もうそろそろ僕が限界だ。SEはまだ少し残ってるけど、疲労感が半端ではない。慣れない環境に心身ともにストレスが貯まってそう
だ。

『パパ！パパ！イタイイタイ?!』

「はは、大丈夫だよ。打鉄が守ってくれてるからね」

「君は先程から誰と話しているんだ」

あ、不味い。僕がISの声を聞いているだなんて知られたら残念な人だと思われかねない。変人扱いは御免だ。

「大丈夫です…何でもないです。」

「……試験はこれで終了にしよう。これ以上変な幻覚を見られても困る」

「すみません……」

変な人扱いは逃れられなかった。まあこれ以上は本当に限界だったし、試験官の判断は僕にとって非常にありがたい。

「試験、ありがとうございます！」

「うむ。しっかり体を休めるように。結果は後日そちらに送らせてもらう」

「はい！失礼します！」

ISを解除して試験官に一礼し、さっさと会場を後にした。

見知った道に出ると、漸く気分が落ち着いてきた。やっぱりISでの戦闘はキツイ。体力もそうだけど、精神もガリガリと削られていく感覚がする。やはり僕には向いていない分野だとつくづく思う。

『パパ、わたしきらい?』

「え?どうして?」

『パパ、つらそう。わたしのせい』

「……ふふ」

打鉄の意外な言葉に一瞬言葉を失ってしまふ。けれどすぐに笑いが込み上げる。

『パパ?』

「あはは!ごめんごめん。確かにISの戦闘はキツイけど、打鉄の事を嫌いになつてる訳じゃないよ」

『ほんと?』

「本当だよ。今日はありがとう。打鉄も頑張ったね」

『わああ……!うん!わたしががんばった!ほめてほめて!』

「よしよし、打鉄は偉いなあ」

打鉄の嬉しそうにはしやく声を微笑ましく聞きながら小指の指輪を撫でてあげる。こうして話していると本当に娘が出来たみたいだ。

「これからもよろしくな、打鉄」

『うん!パパだいすき!』

うん。世のお父様方が娘を嫁に出したからない気持ち少し分かってきた気がする。

今はとりあえず、打鉄が反抗期にならないことを切に願っている。

気紛れ兎の遊び

薄暗い部屋でモニターの明かりに照らされている女性がいた。

誰が見ても分かるほどのヨレヨレになったエプロンをつけ、ウサギの耳のような飾りをつけた女性が楽しそうにキーボードをリズムよく叩いている。

部屋の中は用途不明の機械で散らかっており、お世辞にも綺麗な部屋とは言えない程であった。

「んふふー♪こんな気分が良いのは久しぶりだなく♪」

恐ろしい程のスピードでキーボードを叩いていた女性だったが、モニターに映ったとある情報を見て不意に手を止める。

彼女の前のモニターに映し出されていたのはここ最近世界を騒がしている二人目の男性パイロット——小鳥遊 衛についての情報だった。

彼女——篠ノ之 束が衛に接触したのは数日前だ。

初めは予定外だった二人目の男性パイロットの出現に少し興味を持って調べただけだった。

幼い頃に父親を病気で亡くし、それから母子家庭で育ってきただけの何の面白味もない人間。それが束の初めの評価だった。

けれど彼女は一応彼の監視を続けていた。彼がもし非合法的な方法でISを起動する手段を持っているならそれを取り上げて痛い目に合ってもらわなければならなかったからだ。

だからこそ彼女は見てしまった。彼が誰もいない所でたまに待機状態の打鉄に話しかけている場面を。普通ならヤバイやつだと思うその場面を、束だけは真剣な顔で見っていた。そして彼女は初めの頃よりも強く彼に興味を持った。

そこからは速かった。

ほぼ彼の専用機となっている打鉄のコアNO. を調べ、彼に接触した。

くくくくくくくく

『君はISの声が聞こえるのかな?』

『え?いい、いきなり何の話ですか……?』

『そういうのいいからさっさと答えてくんない?』

『っ!……はい。聞こえますよ。この声が打鉄の声なら、ですけど』

『ふーん。じゃあ質問。君はISを何だと思ってる?』

『難しい質問ですね……一般的なイメージなら女性にしか扱えない強力な兵器、だと思えます』

『……次の質問。お前はそれも兵器だと思ってる?』

『……分かりません。きっとこんなことになる前なら兵器だと思っただと思えます。けど、今は……』

『今は?』

『ISを、この子をただの兵器だとは思えません。この子にはしつかりと感情がある。まだ出会ったばかりだけど、それでも僕はこの子を傷付けたくないし武器も振るって欲しくない。勿論他の子も傷付けたくない』

『……君さ、甘いこと言ってるの分かってる?そんなの無理に決まってるじゃん。相手は容赦なくこっちを殺しにくるんだよ。それなのに傷付けたくないもなければ攻撃もしたくない?そんな矛盾した気持ちで良いと思ってるの?』

『分かっています、これが甘いことなんてことは。でも僕は曲げません。僕は戦いたくありません。傷付いて欲しくありません。それでも戦わないといけないなら——』

『僕は僕の全てを賭してでも大切な人を守ります。僕は剣を取りません。盾を取ります。人を傷付ける武器ではなく、人を守る防具を取ります。僕が倒れなければ守れるのであれば、僕は絶対に倒れません。それが僕が決めた生き方です!』

『……』

『まあ、その為には結局この子の力が必要になってしまおうのがネックなんですけどね……』

『……良いね君。サイコーにイカれてるよ!気に入った!』

『え？え？』

『君に試験の内容を教えてあげる。ついでにちよつとしたコツもね。お姉さんも協力してあげるよ！これからもよろしくね！まーくん！』
『あ？え？はい、よろしくお願ひします……？』

~~~~~

あれ以来束の気分は好調のままだった。試験の時も彼は一度も剣を抜かなかつた。結局は経験の差もあり負けてしまったが、束にとつては彼の始まりにしか見えなかつた。

束の娘たちを大切に思い、傷付けるための武器じゃなく守るための防具を取つた。

小鳥遊 衛は凡才ではあるが、彼の想いには少なからず惹かれるものがあつた。

兵器としてではなく、無限の宇宙を駆けるためのISSの在り方を彼と話すのも中々楽しいかも知れないと束は思っている。

しかしその前に彼が大切に行っているものを守る程の力をつけてもらわなければならない。故に束は楽しげにキーボードを叩くのだ。

「ふふ、あーもう色々とアイディア出てきちやうなあ！第二世代の打鉄につけられる装備なんて考えるの久しぶり！待っててね、まーくん♪あ、そうだ！今度会つたときはまーくんの打鉄のコアも調べてみたいなあ」

今日も篠ノ之 束は鼻歌を歌いながら設計を突き詰める。

……これが後に彼の周りに大きな影響を与えらることも知らずに。

## 入学初日

居心地が悪い。仕方ないといえばそれまでだけど、動物園のパンダの気持ちは今なら分かるかもしれない。

僕は現在もう一人の男性パイロットである織斑 一夏さんと共に肩身の狭い状態へと追い込まれている。

周りを見渡してもいるのは女子ばかり。当たり前といえば当たり前だ。

何せ僕が今いる場所はISについて学ぶ学園、IS学園に在籍しているのだから。

「えーと、君が織斑 一夏くん……でいいんだよね？」

「あ、ああ。お前は？」

「僕は小鳥遊 衛。数少ない男子同士だし、協力していこうよ」

「そうだな。よろしくな衛！俺のことは一夏でいいぜ」

「そっか。じゃあ一夏って呼ばせてもらおうかな。よろしく一夏」

肩身の狭い男同士、何とか友情を築けたと思う。それでなくても僕は女子に対する免疫がないんだから、こういう場所で彼みたいに分け隔てなく接することが出来る人物は頼り甲斐がある。

……大丈夫だよな？頼むよ一夏。

好奇の目に晒されながらも一夏と他愛ない話を続けていると、不意に脳内に『ふああ』という間延びした声が聞こえてきた。恐らくお昼寝していたであろう打鉄が起きたのだろう。初めの頃に比べてだいぶ人間ぼくなってきたいると思うのは僕の気のせいだろうか？

『ばばあ……う……お……』

『おはよう打鉄。ここはIS学園だよ』

『そっかあ……帰ってきたのお……』

『まだ眠い？暫くは何もないと思うからゆっくりおやすみ』

『んー……』

打鉄が寝惚けた声で返事を返すとまた静かになった。やっぱりまだ眠かったようだ。昨日はずっと遅くまで僕とお喋りしていたから

余計眠いのだろう。でもお陰で言葉使いもしつかりしてきた。子供に物事を教えるのは中々に大変なんだなと思えた瞬間だった。

「どうした？いきなり黙りこんで」

「あ、何でもないよ。ちよつと考え事をね」

不自然に会話を止めた僕に一夏が疑問を浮かべたみたいだが、無理矢理に誤魔化す。実は最近脳内で打鉄と会話できることが判明した。何でもIS同士で使うネットワークみたいなのを応用しているらしい。

それに流石にISと話していたなんて初対面の人に言えるわけがない。あのウサミミの人は例外だ。

……今更思い出したけど、確かあの時打鉄がウサミミの人に対して『ママ！』って言ったような？まさかね？

「はい、みなさん席に着いてますね。これからHRを始めますよー」ガラガラと教室の扉を開けて先生が入ってきた。穏和そうな若い先生だ。学生と言われても充分通じそうな人だな。確か山田 真耶という先生で、日本の代表候補だった人だ。兎に角見た目によらず相当な腕の持ち主であることには変わらない。

この先生に頼んでみようかな？

「えーつと……織斑 一夏です。よろしくお願いします」

あいうえお順で自己紹介をしていた中、一夏が自己紹介をしている真つ最中んだけど……周りの視線が凄い。

何かを期待している、そんな視線がするのだ。これを僕にも向けられるとなると僕も萎縮する自信がある。実際一夏は冷や汗を流して必死に考えているようだ。

「……以上です！」

ガタツ！と僕以外のクラスメイト達が席からズツコケる音が聞こえてくる。まさかこの空気の中で自己紹介を無理矢理終わらせられるとは一夏は予想以上の強者だったみたいだ。

それにしてもこのクラスの人達は皆仲良しなのかな？ズッコケるタイミングが完璧だった。意外と皆気さくな人達ばかりなのかもしれない。

そんななんとも言えない空気の中で素早く一夏に接近する影があった。

「いつ——！」

「自己紹介もまともに出来んのかお前は」

その人物は手に持っていた出席簿を一夏の頭に振り下ろし、ものの見事に脳天を直撃した。一夏はあまりの衝撃に最後まで言葉を言うことが出来なかったのか、頭を抱えてその人物を見やる。

「げえっ!?!関羽!?!」

「誰が三国志の英雄だ馬鹿者」

再びバシン！とおよそ出席簿から出すべき音ではない音を出して一夏の脳天を直撃する。流石に2回目は耐えきれなかったのか机に突っ伏している。心なしか叩かれた箇所と出席簿から煙が出ているようにも見える。

なんと恐ろしいスピードとパワーだろうか。この先生は怒らせないようにしないと僕の脳天も危ない。

「諸君、私が織斑 千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

漂うのは圧倒的強者の風格。言ってることは厳しく思えるけど、聞けばちゃんと分かるまで教えて貰える辺り付き合いの良い先生だと思う。

織斑 千冬。IS会で篠ノ之 東に相次ぐ有名人だ。第一回モンド・グロツソの優勝者であり、公式戦無敗の記録を持っている。第二回モンド・グロツソでは最後の最後で不戦敗になったらしい。

……ブレード一本で世界を取れるって、この人本当に人間かな？

そして織斑先生は当然のことながら女性からの人気が高い。そんな

な生ける伝説みたいなのが目の前に現れたら、どうなるかは予想が  
く。

なのであらかじめ両手で耳を塞いでおく。一夏はそんな僕を見て  
首を傾げるが、すぐに理由を知ることとなる。

「キツ——」

「え？」

「「「キヤアアアアアアア!!」」」

両手でしつかり耳を塞いでも聞こえてくる黄色い声に、両耳を塞い  
でおいたのは正解だったと僕は悟った。

そして憐れにも間に合わなかった彼、一夏は三度机に突っ伏してい  
る。織斑先生も呆れ顔で溜め息をついていた。

今後の学園生活、本当に大丈夫なのだろうか？

僕はそんな不安を抱えながらも、ただ苦笑いするしかなかった。

## クラス代表のいざいざ

気不味い。この状況は僕にとって非常に居づらい空気である。

睨み合うのは僕の友人であり一人目の男性パイロットこと織斑一夏くん。対してこちらに（僕にも）敵意を剥き出しにして来ているのがイギリスの代表候補生であるセシリア・オルコットさん。

セシリア・オルコット。先述の通りイギリスの代表候補生であり、第三世代機であるブルー・ティアーズのパイロットだ。どうやら良いところのお嬢様らしく、男性に対しての敵意が半端ではない。悲しきかな、女尊男卑の世界。

第三世代機というのは第二世代とは違い特殊な兵装を備えた現状の最新モデルである。その性能差は打鉄やラファールなどの第二世代と比べると総合的にハイスpekだ。ただし第三世代は第二世代よりもエネルギー効率が悪いのが欠点、だったかな。

話が逸れてしまった。では何故こんな状況へと陥っているのか。それはクラス代表を決めていたからだ。と言つてもここだけでは「意味が分からん」と言われても仕方ないと思うので軽く説明しよう。

クラス代表決めるぞー。自他共に推薦を認めるー。

← 一夏と僕の名前が上がる。拒否しようにも呆気なく却下された。

← 自分が代表に相応しいと思ってる女尊男卑のオルコットさんが猛反発。その際に馬鹿にされる。

← これに一夏がムカツとして反論。反撃としてイギリスの短所を挙げろ。

← これにはオルコットさんがムカツとして睨み合いが発生。今こー。

← という事だ。なんというか、なんか子供の喧嘩みたいだ。前に近所

の子供達がこんな喧嘩をしていたのを見たことがある。

『パパー。この空気イヤ』

『僕も好きじゃないよ。でもなんて言っても火に油を注ぐような気がするんだよね』

『火に油?』

『あ、今度意味を教えてあげるね』

『うん!』

打鉄の成長は順調だ。このまま賢く優しい子に育ってほしいものだ。これが父性というものだろうか。

打鉄と話ながら（表向きは静観）周りのクラスメイトたちを眺めてみる。誰も彼もが少し疲れ始めている。織斑先生もなんか厳しい目で静観してるだけだし、誰かがどうにかしないとイケない、よね……やだなあ。

「はあ……先生、織斑先生。提案があります」

「小鳥遊か。なんだ」

「このままですと時間が勿体無いですし、実際に戦って決めるのはどうでしょうか?その方がお二人も納得出来ると思います」

「そうだな。小鳥遊の案を採用しよう。それでは——」

よし、何とかこの場をやりきったぞ。あとは二人の代表決定戦と言うことにして僕はひっそりと——

「——ということにする。対戦カードはオルコットと織斑、そして発案者である小鳥遊だ」

やっぱり逃げ切れなかったよ……嫌だなあ……戦いたく無いなあ……。

こうして一夏とオルコットさん、そして僕の代表決定戦が一週間後の月曜日放課後に行われることになった。

僕と一夏の対面なら兎も角、僕や一夏みたいな素人が数百時間にも及ぶであろう稼働時間を誇る代表候補生のオルコットさんに勝てるわけがない。自分で発案しておいて出来レースもいいところだ。このままいけばオルコットさんが代表になるだろう。代表になりたくない僕や一夏にはちようどいいタイミングだと思いたい。

…一週間かあ。アリーナの使用許可貰わないと。



V Sブルー・テイアーズ　　くその手に盾を、覚悟を胸に

一週間後。月曜日の放課後にてアリーナの観客たちは大いに盛り上がっている。

あのあとは大変だった。一夏がいきなり彼の幼馴染みという人物に拉致られたり、山田先生に特訓をお願いしたらボコボコにされたり、女子が言い寄って来るたびに逃げ出したり、中々波乱に満ち溢れた一週間だったと思う。個人的に一番大変だったのはオルコツトさんと篠ノ之さんの相手だったけど。

オルコツトさんは僕と一夏に対して当たりが強いし、篠ノ之さんにいたっては「皆敵だ!」みたいな剣呑とした雰囲気醸し出していたから、一夏が迷いなく篠ノ之さんと僕を昼食に誘ってきた時は辞退しなくなった程だ。

「小鳥遊。すぐに行けるな?」

「大丈夫です。……先生、辞退しては——」

「許さん。男なら覚悟を決めろ」

「あつ、はい」

織斑先生にダメ元で提案してみるが案の定一刀両断された。やっぱり戦うことからは逃れられないみたいだ。

まあ唯一の救いは相手の主力兵器がエネルギー兵器ばかりだということか。第三世代の燃費の悪さも含めれば何とかなるかも知れない。

因みに一夏には今日専用機が届く予定になっているらしいけど、未だに届いてはいないので僕が先に戦うことになってしまったのだ。

『パパ!わたし頑張る!パパを守ってあげるね!』

『ありがとう。じゃあ僕も打鉄を守るよう、一緒に頑張ろう』

『うん!パパと一緒に!えへへ』

打鉄のコンディションも快調。装備も急増だけど整った。織斑先生にアドバイスも貰ったし、山田先生にも特訓を付き合ってもらっ

た。

勝てないまでも、善戦まではしたい。目指せ完全防御。

臆病は防具だ。視界を広く、全体に気を配ろう。

「頑張れよ衛！応援してるぜ！」

「やれるだけやってみるよ」

サムズアップを送ってくれる一夏に同じくサムズアップで返すと、打鉄を展開する。

その姿は以前と少し変貌しており、他の打鉄よりも装甲が厚くなっている。

「行こう！打鉄！」

『うん！パパ！』

「小鳥遊 衛、打鉄——」

『『出ます！』』

カタパルトに乗って勢いよく飛び出していき、未だになれない飛行に少し戸惑いながらもアリーナの空を駆ける。その先には青をメインカラーとしたIS——ブルー・ティアーズを纏ったオルコットさんが悠然と空の上に佇んでいた。

「ようやく出てきましたわね。レディを待たせるのは失礼ですよ」

「ごめんねオルコットさん。何せまだ一週間ちよつとしか動かしてないから色々と手間取ってしまったんだ」

「ふん。そうでしたわね。あなたのような素人がわたしのようなエリートと戦えることを光栄に思いなさい」

「そうだね。こんなことは滅多に経験出来ることじゃない。戦うのは好きじゃないけど、この子を守るためにも経験値にさせてもらうよ」  
「口だけはお達者ですこと。まあ良いですわ。本命はあなたではないですし、すぐに終わらせてあげますわ！」

オルコットさんが手に持っていたライフルで僕に標準をつけて撃ってくるが、それを右肩のシールドを前に出すことでビームを受け

る。その際に少し角度をつけることも忘れない。

「あら、てつきりこれで足りるかと思っていましたわ」

「僕もこの子も流石にそんなに柔じやない」

『そうだそうだ！パパと私を馬鹿にするな！』

「第二世代の機体だからといって手加減し過ぎましたわね。次はもう少し激しくしてあげますわ！」

オルコットさんのブルー・ティアーズから二つの小型機械が射出される。ようやく出てきたか。

ブルー・ティアーズ。イギリスが何とか作り上げた第三世代の機体で、特殊兵装は機体名と同じ名前のビット兵器ブルー・ティアーズ——通称BT兵器。遠隔操作型の小型兵器でブルー・ティアーズから一定範囲の間で自由自在に動かせる厄介な武器だ。それぞれに砲門があり、縦横無尽に空を駆けながら四方八方からビームを飛ばしてくるのがセオリーだろう。流石に両肩のシールドだけじゃ足りないな。凄い速さで僕の四方を飛び回るビットに警戒しつつ視線はオルコットさんから離さない。ビット兵器で取るであろう戦略の基本は

『パパ！右方向斜め上！』

「っ！」

打鉄が教えてくれた方向に右肩のシールドを構えてビットから打ち出されるビームを受け止める。勿論SEは減っていない。

『どんどん来るよパパ！』

「わかっ、てる！」

明らかに死角となっている角度から撃ち出されるビームを打鉄の指示のもとに受け止めていく。しかしライフルから撃ち出されるビームも含めると向こうは射撃武器3つに対してこちらは盾が2つ。このままでは数の不利が響いてくるだろう。

ここは、やるしかない！

二方向から同時に撃ち出されるビームを左右のシールドで防ぐ。そうすると僕の体はがら空き。そこを彼女が見逃す筈がない！

「胴体ががら空きでしてよ！」

オルコットさんにとつては確実に入ったであろう攻撃。

しかしそれは――

「なっ!?」

「慢心するなかれ、ってね」

僕が高速展開した3つ目の大型シールドによって阻まれる。

高速切換――ラピッド・スイッチとまでは言えないけど、切り替えるんじやなくて収納、展開するだけなら何とかここまでありつけた。残念ながらラピッド・スイッチを会得するにはまだまだ時間が掛かりそうだから高速で収納、展開する術を出来るだけ鍛え上げた。

これを使えば大型シールドで動きが遅くなろうと高速で収納して動けば問題ないし、被弾しそうになつたらすぐ高速展開させればいい。武器を使わないからこそ集中して使える技だ。

「あなた本当に素人ですか？ラピッド・スイッチなんて素人がするものではなくてよ！」

「残念だけど僕もラピッド・スイッチは出来ないよ。僕にまだそんな技術力もなければ時間もないし、ね？」

「っ、予定変更ですわ。あなたも全力で落として差し上げます！さあ踊りなさいブルー・ティアーズ！」

先程の2機に加えて更に2機。計4機のビット兵器が迫り来る。ここからがブルー・ティアーズ戦の本番だ。

4方向からの立体射撃に加えライフルの射撃も含め5つの砲門を防ぎ切らなければならぬ。さらに言えばブルー・ティアーズには2機のみ사일ビットまで搭載されていた筈。

主装備であるライフルに計6機の射撃ビット。恐ろしい程の遠距離射撃機体だ。しかしそこに希望がある。

「どこまで戦えるか見物ですわね！」

「くっ……やっぱキツイ……！」

『頑張ってパパ！上下左右からの攻撃！』

「ぐっ、あああああ！」

左右二面からの攻撃と真つ正面の攻撃は防げたものの残り二撃を

防ぎ切れなくて被弾する。しかし装甲を予めビーム耐性の高い装甲に変えてもらっていたのでダメージは最小限だ。少なくともライフルからの攻撃さえ当たらなければ何とかなる。

打鉄の最大の武器、それは防御力の高さにある。ラファールに比べ機体は重く積載量も拡張領域も少ないものの、その防御力は量産機体の中でも上位に位置取れるだろう。エネルギー兵器を扱う訳でもないので第二世代の燃費と相まってエネルギー効率は良い方だ。

僕が見出だした希望。それはエネルギー兵器によるエネルギー切れだ。特に第三世代は先述の通りスペックが良い分燃費が悪い。しかもブルー・ティアーズの兵装はミサイルビットと近接武器のインターセプター以外全てエネルギー頼みの兵装。使いすぎればいずれエネルギー切れを起こす。それにミサイルビットだって打ち出すのは極論で言えば実弾だ。外から補充しない限り再装填されることはない。この世に弾数無限なんて存在しない。

ひたすら耐え忍ぶ。決して倒れることはしない。勝ちたいなんて思っていないけど、負けたいとは思わない。

「くっ、いつまでそうして耐え続ける気ですの!？」

「は、はは、君が身を引いてくれるまでさ!」

あいつも変わらずビットからの攻撃を被弾するが、ライフルからの攻撃だけは絶対に被弾しない。少しずつSEが削れていくが、まだまだ許容範囲だ。対して向こうはビット4機に加え威力の高いライフルも同時使用している。エネルギーの消費量は向こうの方が多いだらう。

「そうやって男性というのはやり返しもせずただされるがまま!男性というのは弱い生き物ですわ!あの人だってそうだった!」

「人を傷付けることが強さの象徴なら!僕はそんなものいらな!僕はただ手の届く人たちを守るだけでいい!その為にも僕は立ち続ける力がほしい!僕が倒れなければ守れるものがあるなら、僕は絶対に倒れはしない!」

「そんなのただの綺麗事ですわ!あなたに!男性にそんなことが出来る訳がありません!」

オルコットさんはまるで誰かを僕を通して睨み付けているかのようだった。彼女から感じるのは怒り、だろう。

僕に彼女が見ている男性は分からない。だからその人に関しては何も言えない。

それでも僕の覚悟だけは証明しなければならない。

僕は……彼女の心を救いたい！

『打鉄、僕は——』

『やろうパパ！わたしも一緒だから大丈夫！』

『……ありがとう。僕は君に会えて良かった』

思考が乱れたせいかわかると攻撃してこないビットたちを見やっつてから、僕はシールドを全て解除する。

「なら試してみればいい！僕がただ綺麗事を言ってるだけかどうかを！僕の覚悟を！僕は！僕たちは本気だ！」

「く、あ、ああ！お黙りなさい!!」

停止していた4機のビットに加えライフルとミサイルビットの総攻撃。フルバーストとも呼べるその攻撃を装甲だけで受け止める！

「ぐっ！うああああ!!」

『うっ！くううう!!』

凄まじいダメージがSEをどんどん削っていき、その勢いは止まる事なく今なお減り続ける。増加装甲が剥げ落ち、本来の打鉄の装甲にさえダメージを与えていく。

そして辺りはミサイル着弾時の煙で見えなくなった。

「はあ……はあ……」

セシリアは肩で息をしながら各装備の残弾を確認する。ミサイルビットはまだ少し残っているが、エネルギー兵器の残弾はほぼ皆無だ。流石にエネルギーを消費しすぎたようで、これ以上のエネルギー

兵器の使用は不可能であった。

「結局男性なんて口だけですわ……次の戦いのためにも早くエネルギー補充を——」

そこでセシリアははたと気付いた。未だに勝利者宣言がされていないのだ。セシリアとしては全身全霊とも言えるフルバーストをお見舞いして終わりの筈だった。

セシリアがジツと衛のいた場所を見てみると、そこには信じられない光景があった。

「う、嘘ですわ……」

「は……言った筈だよ……僕たちは絶対に倒れはしないって……!」

始まる頃よりも見るも無惨な状態になりつつも、それでもフルバーストを全て受けきってしまったのだ。それはもはや第二世代とは思えない程の強度であった。

セシリアは信じられずにただ震えた。今自分の前に立っているこの男は一体何なのか、どれ程強い思いがあればこのような狂気染みた事を成し遂げることが出来るのだろうか。

「ま、まだ弾は残ってますわ!!」

セシリアはすぐに我に返って残りのミサイルビットの弾を全て撃ち尽くすが、衛は満身創痍な体で大型シールドを高速展開して全てを防ぎ切ってしまった。

彼女に残された武装は近接武器のインターセプターのみ。この時点で勝負は決まったようなものだった。

「弾は全て使いきった筈、だよね?まだ続ける?」

「……いいえ。あの攻撃を耐えきられてしまった時点で勝負は決していました。……小鳥遊さん。あなたの覚悟、しっかり拝見させていたできましたわ。わたくしの負けです」

セシリアはまるで憑物が落ちたかのようなスツキリした顔で負けを認めた。この時、既にセシリアは男性を——小鳥遊 衛を見下す事を止めたのだった。

そんなセシリアに対して、ボロボロの衛はニッコリとセシリアに微笑みかけるのであった。

こうして一回目の試合はセシリアの敗北宣言により小鳥遊 衛が勝利を納めることになり、アリーナ内に大きな歓声が沸き立つのだった。



## クラス代表決定戦、その結末

結果を言おう。クラス代表には一夏が就任した。

実はセシリアさん（本人にそう呼んでほしいと言われた）との戦いの後、意外とストレスが貯まっていたのか意識を失って倒れてしまったのだ。その結果僕は自動で不戦敗、セシリアさんと一夏は全力の勝負で戦った結果白式のエネルギー切れでセシリアさんが勝利したらしい。本来ならセシリアさんがクラス代表に就任する筈だったけど、本人がそれを辞退して結果的に一夏がクラス代表に収まったという事だ。因みにこれは全てセシリアさんから教えてもらった。

セシリアさんかというと、ただ男性というだけで見下す事を止めたみたいだ。その証拠に一夏とも仲良くやれている。まあなんか仲良く、というか積極的、というか……。

それが僕にも来るから頑張って対応してるものの、やっぱり恥ずかしくて逃げてしまう。

余談だが、セシリアさんが僕に近寄ってくる度に打鉄の機嫌が少し悪くなる。前に第二世代という事を馬鹿にされた事を根に持っているのかも。

それを打鉄に聞くと『知らない！』と言われる。地味に心に響くので聞くのを止めた。こんなに響いたのは特訓中に打鉄と喧嘩したとき以来だ。

そして現在、クラス代表就任祝いでクラスメイトたちがお祝いパーティーをしている。一夏は沢山のクラスメイトたちに話しかけられて大変そうに見えるけど、それを淡々と返していく辺り手慣れた感じが凄い。一体彼は何人の女の子たちを泣かせてきたのだろうか。

でも一夏の側にいる篠ノ之さんがすごく不機嫌そうだ。一夏の幼馴染みらしいし、もしかしたら嫉妬してるのかも。僕の友人がいつか刺されない事を祈る。

僕はと言うと、あまり目立たないように隅で静かに楽しもうとしていた。そう、していたのだ。けれど僕は二人めの男性パイロット。どうあがいても目立たない筈もなく。

「小鳥遊くん！小鳥遊くんもこっちおいでよ！」

「いや、僕はここでゆつくりさせてもらおうよ。まだ体調が万全じゃないからね」

「小鳥遊くん！オルコットさんとの試合凄かったね！かつこ良かったよ！」

「はは、ありがとう。そういつてもらえて嬉しいよ」

こんな感じで結構話し掛けられるのだ。ただ防御していたばかりの僕よりも一夏の方が華々しく戦えていただろうに、僕に氣遣って格好いと言ってくれるのはクラスメイト故の優しさか。お世辞でも嬉しいものではある。

『むー、パパ嬉しそう』

『え？まあお世辞だろうから本気にはしてないよ』

『むー……！』

『打鉄？』

『パパなんてしーらない！』

『え？え？打鉄さん？どうしたの!?!』

何故か分からないけど打鉄の機嫌が悪い。僕はいつ打鉄を怒らせるような事をしたのか、全く覚えがない。

この時、打鉄の謎の反抗期に頭を抱える僕の側にひっそりと近付いてくる影に僕は気付かなかった。

## 新しい力、心に潜む何か

セシリアとの戦いに惜しくも負けた俺は本来ならクラス代表になることはない筈だった。

けどセシリアが何故かクラス代表を自ら降りてしまったから俺がクラス代表になってしまった。

本当は俺とも戦ってみたかった。あの高い防御力を前にして俺がどこまで通用するのか、それが気になって仕方なかったんだけど。まあこの学園で過ごしてれば今日みたいに嫌でも戦うことがあるだろうし、その時には真っ正面から戦ってみたい。

クラスメイトからの激励を受けながら、箒となんとは無しに話をしている、ふと一人足りないことに気付いた。

「あれ？衛はどこ行ったんだ？」

「私は知らんぞ」

箒に聞いても知らなかった。というかなんか衛と箒の相性って悪いよな。箒は衛に対して素っ気ないし、衛も箒が近くにいると逃げるように離れてくし。二人とも仲良く出来ないもんかなあ。

それにしても衛のやつ、一体どこにいったんだ？あいつとも話したかったのになあ。

僕は現在ピンチである。別に命の危険があるわけではない。でも別の意味で危険な状態だ。

薄暗い廊下の隅で壁を背にした僕は今頃すっかり顔が真っ赤になっっているだろう。僕の腕に柔らかい感触が先程から感じられ、甘い吐息が耳の近くに感じられる。

「あ、あの、何でここにいますか？」

「何でだとおもう？」

「それが分からないから聞いてるんですけど——ウサギさん」

「のんのん、それじゃダメダメだよ？ちゃんとわたしには東さんとい

うプリティーな名前があるんだから」

「え？……えええわぷっ」

「ここらまーくん。大声出したらバレちゃうよ」

驚きの事実に叫びそうになった僕はウサギさん——束さんに口を手で塞がれて声を殺されてしまう。

うっ、む、胸の感触があああ!!?

「おや？おやおや？もしかしてまーくん……んふふ、中々初だね♪  
顔真っ赤にしちゃって」

「んー！んー！」

束さんが面白そうなオモチャを見つけた子供のような顔で僕を見るけど、当の僕はそれどころではない。

何とか理性を保ちながら抗議の声を上げる。

「おっと、勿体ないけどこんなことをしてる時間はあんまり無いね」

「ぷはっ！一体なんなんですか！」

「ごめんねまーくん。今日はこれを渡しにきたんだ♪」

そういつて取り出したのはメモリーカードのような物だった。はて？僕はあまり機械に強い方ではないのだけど。

「それじゃあ整備室に行こっか。束さん自ら設定してあげよう♪」

「え？ちよ、今ですか？というより束さん不法侵入になるんじゃない？」

「ただの凡人どもが作ったルールなんて知ったこと無いね」

「ええ！ルールくらいは守りましょうよ！ちよ！待ってー！」

束さんに手を捕まれてズルズルと引っ張られるように連れていかれる僕。何故か束さんが選んだ道に不自然な程人がおらず、何かおかしいと感じていると『クスクス』という打鉄ではない笑い声が聞こえた気がした。

束さんは僕を引き摺りながら（凄い力だった）迷いなくI Sの整備室へとたどり着いて、堂々と中へと入っていく。勿論僕の手は捕まっただまなので僕も一緒に整備室に連れ込まれる。

「……さて、それじゃあ邪魔者もいないし。始めよっか？」

「始めるって、何をですか？」

「んもうーまーくんだったら分かつてる癖に〜♪」

東さんが甘えた声を出しながら僕にしなだれかかつて来ようとしてくるのでやんわりと腕で受け止め、少しずつ引き離す。これ以上僕の理性を削られるのは堪らない。このままでは僕はまた保健室に運ばれかねない。

「そういうのいいですから、教えてくれませんか？」

「もう、まーくんは恥ずかしがり屋さんだね。仕方ないから今日はこれくらいにしておいてあげよう。今日持ってきたのはまーくんの打鉄の専用装備だよ！」

そういつて東さんは端末にメモリーカードを差してカタカタと素早く端末を操作する。するとISを配置するスペースに人型の機械が出現した。カラーリングは緑色で、重厚なシールド二つが目を引く。どう見ても装備というよりはISに見える。

「これは……IS？」

「つぼく見えるよね。でもこれは真正銘打鉄の専用装備だよ。仕組みは増加装甲と一緒だね。ただ増加装甲とは違って予め装備する必要は無いんだよ。戦闘中でも着脱可能なように作ったからね！」

「そ、それは凄いですね……」

むしろ僕の為なんかこんな凄いものを作ったりして良かったのだろうか。これって各政府の人たちが欲しがるレベルの物だと思うんだけど。

「安心して。これはまーくんの打鉄にしか使えないように設定されるから、他の打鉄は装備どころか展開すら出来ないから盗難防止もバッチリだよ！」

「はあ……でも僕は別に新しい装備がなくても——」

「まーくん。確かにまーくんの心意気は立派だよ？でも堪え忍ぶだけじゃどうにもならない時が絶対に来る。そんな時にまーくんに後悔して欲しくないんだよ。私の娘同然のこの子達を想ってくれる君の為にも、ね」

「それは……」

確かに東さんの言うことは分かる。今回のセシリアさんとの戦い

だってエネルギー切れを起こしてくれたからこそ勝てたようなものだ。これで相手がエネルギー頼りではない敵とかだったら間違いない。僕は負けていた。今回はただ相性が良かっただけなのだ。

でも、それでも僕は傷付けるという行為が怖い。死の姿が脳裏にちらつく。父さんが死んだ時の光景を嫌でも思い出すのだ。父さんは病死だったが、人はあんなにも簡単に死ぬんだと初めて知った。元に父さんは滅多に風邪も引かなかった元気な人だった。そんな人が意図も容易く死んだのだ。ならば暴力で人が死なない理由がない。

もし僕が相手を傷付けたことでその人が死んでしまったら？

もし僕が人を殺してしまったら？

そんなの僕は絶対に耐えられない。

それならいつそ僕が死んでしまう方が――

『……パパ？』

「っ！」

「まーくん！どうしたの？すつごく震えてるよ！」

ハツとして顔を上げると、心配そうにこちらの様子を伺う束さんがいた。脳内にも打鉄が心配している声が聞こえた。

僕は今何を考えていた？こんなんじゃないやまるで自殺志願者じゃないか。すっかりしろ！僕はそんなんじゃないだろ！

『――本当にそう思ってるのかね』

「!?誰だ!?!」

見知らぬ、けれど何処かで聞いたことがあるような声にゾワリと背筋が冷える。焦って周りをみるが勿論のこと束さんと僕しかいない。

「まーくん！落ち着いてー！」

「っ、すいません……」

束さんの言葉で制止した僕は、一度落ち着く為に深呼吸をする。

大丈夫。さっきとは違って思考はクリア。頭もちゃんと回る。大丈夫。いつもの僕だ。

「……ふう、すいませんでした。ちよつと取り乱しました。もう大丈夫です」

「ほんとに？無理してない？」

「はい。説明の続きをお願いします」

「……そっか。それじゃあどんどん説明していくよ♪といつても今は大雑把にしか説明しないから、あとは使って覚えてね？まずはこの玄武について——」

束さんからの各装備の説明を受けながら、僕は僕の中に潜む得体の知れない何かに怯えていたのだった。

## 中国からの使者

あらゆる方向から飛来する攻撃を避け、防いでいく。ハイパーセンサーで常に周囲を見回して、防ぐべき攻撃と避けるべき攻撃に優劣をつけて最善の行動を選ぶ。

既にISスーツが汗を吸って重くなっており、止まぬ攻撃に疲労が溜まっていく。それでも僕は一心不乱に体を動かし続ける。

『パパ！もう止めようよ！もう一時間近く休まずに動いてるよ！』  
「ま、だ！まだ動け、る！」

打鉄の制止の声も聞かず、ただひたすらに攻撃を避け防ぎ続ける。もうどれ程被弾したのかも分からないけど、それでも前よりも動きは身についてきた筈だ。

死角に回り込んだ攻撃ビットをハイパーセンサーで捉え、両肩のシールドを咄嗟に背後に回して攻撃を防ぐ。

そしてがら空きになった僕本体へと4体のビットが一斉に僕に向かってビットを撃ち出す。

「うああああ!!」

4本のビームを新しい装備——対エネルギー二重重厚シールド、玄武を高速展開する。すると打鉄の装甲にどんだん緑色の増加装甲が装着されていき、大型の盾が二つ出現した。様々な角度から狙い撃ちにしてきたビームに対して玄武をそれぞれ2分割、計4つの重厚シールドを駆使して全てを無力化する。

その姿は動く要塞その物である。エネルギー兵器ように作られたそれはビームを難なく無力化し、実弾に対しても驚異的な堅さを持って弾き飛ばす。

万が一に玄武をすり抜けたとしても、外付けされた装甲を削ることは出来ずSEもほぼ減らない。防御力の向上を目指して作られたそれを越えるには、それ相応の威力が求められるだろう。

ただ欠点があるとすれば、前にセシリアさんとの試合で用いた装備よりも重いので移動速度は期待できない。

一時間きっかりに全てのビットが攻撃を中止して散り散りになっ



ていく。設定した時間通りだ。

「はあ……はあ……意外と……負担が大きい……」

『パパ大丈夫？早く休まないと……』

「そうだね……帰ろうか、打鉄……」

なんとも言えない不安感がまだ纏わり付いているけど、前よりはマシだ。あとは部屋に戻ってゆつくり休もう。

アリーナから帰ろうとすると、壁に背を預けてこちらの様子を見ていた女の子と目があってしまった。ツインテールの勝ち気そうな女の子が僕の方へと迷わず歩いてくるのが少し怖い。

「あんたが二人目の男パイロットね」

「そうなるね。僕は小鳥遊 衛。えーと、君は？見たことないけど」

「あたしは鳳鈴音。中国の代表候補生よ！」

なるほど。見た目とは違って（あまり違ってはいないかもしれないけど）相当な実力者みたいだ。

鳳鈴音。先程本人が説明してくれた通り、中国の代表候補生である。専用機は甲龍であり、根っからの格闘機だ。第三代にしては珍しくエネルギー効率を良くした機体であり、本人のセンスも相まって接近戦では猛威を振るわれるだろう。現状僕がもつとも不得意とするタイプだ。

「それで、鳳鈴音はどうしてここに？」

「言いにくいだろうし鈴で良いわよ。職員室を探してただけど、なんか戦闘音っぽい音が聞こえたから気になって来てみたのよ。そしてたらあんたがいたって訳」

「そうだったんだ。拙い訓練を見られて恥ずかしいな」

「そうでもないわ。あんた意外と才能あるんじゃない？そんなに汗びっしょりかいちゃってさ」

「あー……ごめん。配慮が足りなかった。シャワー後で良ければ案内するよ」

「ありがとー広すぎて面倒だったら無いわ……」

ニカッと笑う鈴さんにこちらも笑顔で対応して、素早くシャワールームへと駆け込む。

こうして僕は中国の代表候補生との接触を果たしたのだった。

それにしても不味いな。代表候補生に訓練を見られた以上、その動きは対策されるかも知れない。やっぱりもう少し訓練の量を増やして重点的に基本の動きを——

『パーパー！無理しちゃダメ！』

『……わかったよ』

——どうやらあまり無理は出来なさそうだ。

## 打鉄の独白

あの後無事に職員室へと鈴さんを送り終えた僕は寮の自室に戻りベッドに横たわっていた。

体が鉛のように重い。想像以上に負担を強いていたみたいだ。一時間でこれではこの先が思いやられる。

『パパが無理な計画してるからだよ！体壊れちゃうよ！』

「そんなに無理してるつもりはないんだけどね。僕は皆よりも経験も知識も浅い。だったら誰よりも体を動かして、勉強しないと」

『だからそれが無理してるんだよ！何でそんなに焦ってるの？パパ』

「……僕は世界で二人しかいない男性パイロットなんだ。何も出来ないままじゃ駄目な事が来るかもしれない。僕は、僕や母さんは無力だから」

『それならイチカって人もだよ？』

打鉄と話しながら何とかベッドから体を起し、机へと重い足取りで向かう。机の上にはISについて書かれた分厚い教科書と何処にでも置いてあるようなノートが数冊、そしてありふれた筆箱が置いてある。このように教科書は入学前にもらった教科書だ。未だに分かりにくい所があつたりするので、分かりやすく噛み砕いてノートに書き写している。

「二夏は僕よりもマシな方だと思うよ。何せ姉がああ織斑千冬だからね。その弟となれば国も簡単に手を出せないだろうし、織斑先生だつて守ってくれると思う。でも僕は違う。僕の父さんはもう居ないし、母さんは一般人だ。国に対しての力も持ってなければ国が何かを認めている訳でもない。それは僕にも言えるんだよ」

椅子に座って付箋を張っていたページをめくる。そしてお目当ての内容を見つけてノートに自分で分かりやすいようになるべく噛み砕いて書いていく。視界がボヤける度に目を擦って焦点を戻し、書き連ねていく。

「だから、誰が相手だろうと母さんを守れるようになりたい。父さんと約束したんだ。父さんの代わりに僕が母さんを守るから、ってさ。」

だ、から……僕は……もつと……で、も……打……に迷  
……………」  
駄目だ。瞼も重くなってきた。意識もだんだん遠くなっていく  
……やっぱり……慣れないことは……

『パパ？寝ちやっただの？』

パパは机の上に頭を乗せたまま規則よく寝息をたて始めていた。  
やっぱり限界に近かったんだ。それなのに次はお勉強までしようとしていた。パパにはちゃんどベッドで休んでほしいけど、せっかく休んでくれたんだからこのまま寝ていてほしい気持ちもある。これがパパが教えてくれた「もどかしい」って気持ちなのかな？

『頑張りすぎだよ。パパ……』

パパは優しくして優しい人だ。いつもお勉強は熱心に毎日してるし、訓練だつて場所を取ってしっかきやってる。他の人に質問されれば親切に分かりやすく説明してあげてるし、分からない所は自分から率先して聞きに行く。

自分で女の子は苦手つて言ってるのに、いざ可愛い女の子が近くに来ると少しビクつきながらも少し鼻の下を伸ばしちゃう所はある。

それでもパパはいつも私に優しくしてくれるし、色々知らないことを教えてくれる。わたしがここまでしっかきした個を持てたのも、こんなにも流暢に言葉が話せるようになったのも全部パパのお陰だ。

わたしを生んでくれた、作ってくれたのはママだけど、それでもわたしはママよりもパパが好きだ。

パパと出会うまではとても辛かった。色んな子達がわたしを使ってくれていたけど、誰もわたしを褒めてはくれなかった。誰もわたしを気にかけてはくれなかった。

誰も……わたしの声を聞いてくれなかった。

結局みんなラファールの子達の方に行ってしまったって、わたしは一人ぼっちだった。そんなガラクタ寸前だったわたしは突然学園から持

ち出され、何かの検査に使われた。

目の前には沢山の男の人がいて、わたしを見ていた。けどその人たちは本当はわたしのことなんて見ていなかった。見ていたのはもつと他の何かだったんだと今思う。

でも、それでもわたしは誰かにわたしを見つけて欲しくて。だから呼んでみた。『パパ』って。誰も気付かないだろうなあって思いながら。

けど一人だけ、たった一人だけわたしの声に反応してくれた人がいた。その人はわたしの声だとは思ってなかったのか、辺りをキョロキョロと見回していたけれど、それでもわたしは嬉しかった。

そんな人がわたしに手を伸ばして、触れてくれた。

たとえ検査のためだと分かっているけど、わたしは嬉しかったんだ。この人と一緒にいたいって、機械のわたしでも本当に思った。

だからわたしはこの人に——パパに手を伸ばしたのだ。

今までの日々はこの人に会うためだったのだと、本気で思ったのだ。

『パパ……わたしも頑張るよ。パパは一人じゃないから。いつもパパと一緒にいるよ。わたしもパパと一緒に守るよ。パパの大切なものをわたしも守りたいから……』

パパはぐっすり眠っていて聞こえてはいない。でもそれでいいんだ。これはわたしの誓いなんだから。

大好きなパパを、大好きなパパが守りたいものを守る為の誓い。

だからこそわたしも今のままでは駄目だ。ママから与えられた装備に頼るようなままのわたしじゃ駄目なんだ。

わたしも変わるんだ。世界一格好良いパパの為に。

## お転婆少女はセカンド幼馴染み？

翌日、机の上で朝を迎えてしまった僕は体をバキボキと鳴らしてフラフラと顔を洗いに行く。

今日のアーリーナの使用許可は貰えなかったので、今日の放課後はI Sの訓練は休みだ。しかし基礎体力を作ることには可能なのでアーリーナが使えない日はいつも走り込みをしている。

走り込みならあまり打鉄にも心配を掛ける必要はない為、意外と重宝しているのだ。

それが終わったら次は次の授業の予習と終えた授業の復習、そして分かりやすくノートに書き写す作業が始まる。

これが僕がこの学園に来てからほぼ毎日こなしている日課だ。案外ストレスも溜まるかと思っただけど、息抜きに打鉄に物を教えたり他愛ない話をしたりしている為か思っただほどストレスは溜まってはいない。

『ふぁ………パパぁ、おはよー………』

「おはよう打鉄。今日は午後までI Sの訓練はないから、もつとゆっくり寝ていても大丈夫だよ」

『んーん………だいじょーぶ。わたしもおきてるー………』

そうは言うものの、打鉄の声は未だ眠そうだ。別に僕たち人間と合わせなくても気にしないのに。それでもこの子に愛情が湧くのは父性故なのだろうか。もしかしたら父さんも僕が小さい頃はこんな気持ちだったのかもしれない。尤も、今ではそれを知る術はないんだけど。

『パパぁ………？』

「ん、何でもないよ。眠くなったら何時でも寝ちゃって良いからね。でも午後の授業には起きてもらえると助かるかな？」

『はぁーい………』

可愛らしい返事をする打鉄に思わず頬が緩むが、そろそろ部屋を出ないと間に合わなくなるので頬を叩いて気合を入れ直す。

今日もしっかり学ばなければ。知識は宝である。

ガヤガヤと今日も騒がしい1組の扉を開けると、決まっていたも女の子たちの視線が僕に突き刺さる。

まあ遠目で見られている分にはもう慣れた。

「おはようみんな」

「おはよー小鳥遊くん！」

「おはよう！」

自分の席に着くまでもクラスメイトたちと挨拶する。当初よりも落ち着いてくれたとは思うが、未だ僕や一夏に接触してくる人たちは多い。

「よっ！衛！」

「おはようございます、衛さん」

「おはよう」

「一夏、セシリアさん、篠ノ之さんもおはよう。みんなが集まって何の話をしてたのかな」

一夏の隣の席について教科書を取り出しながら話題に乗っかる事にした。こうした交友関係も大切なのだ。

それに何か有益な情報が訪れたりもする。聞いておいて損はない。

「クラス代表戦の話をしてたんだよね」

「うわっ!?ビックリした……いきなり後ろから出てこないでよ、布仏さん」

「あはは、もーくんの反応が楽しくてつい」

突如後ろから音もなく現れたこの女の子は布仏 本音さん。何故かダボダボの制服を好んで着ていて、裾は最早手をすっぽりと隠してしまっている。とてもフワフワとした感じの不思議な女の子だ。そして僕の元の部屋の相方でもある。今は一人部屋を満喫してるけど。「クラス代表戦かあ。そういえばもう近いんだよね？一夏に期待してるよ」

「いやいや！そんな期待されても困るって！まだ全然ISの動きに慣

れてないし!」

「あれ? 確か篠ノ之さんとセシリアさんに教えてもらうって話だったんじゃない?」

「ああ……そうなんだけどさ。箒はなんか感情論って言うか、感覚派って感じでよく分からなくて……」

「なんだと!?! 何故わからんのだ! いつもあれほど説明してると言うのに!」

「篠ノ之さんの説明では分かるものも分かりませんわ! だからわたくしが一夏さんに教えます!」

「因みにセシリアさんは?」

「セシリアは……逆に小難しい説明ばかりでよくわかんねえ……理論派ってやつだ……」

「あー、うん。セシリアさんのは何となく想像がついたよ」

「なっ、そんな!?! 衛さんまで!?!」

「ふん! やはりごちゃごちゃ語るよりも体を動かした方が手っ取り早いのだ!」

セシリアさんはしっかりと勉強してたおかげか、事細かに計算して動いているらしい。そのせいで他の人に説明するときも理論立てて説明してしまうんだろう。

意外だったのは篠ノ之さんだ。彼女もどちらかと言うと理論派だと思ってたんだけど、どうやら感覚派だったみたいだ。

確かにこれは教わる方が大変だ。むしろ今までよく頑張って訓練してたと思う。

「……良かったら一夏も僕と一緒に訓練する? と言っても僕の訓練は味気ないものだろうし、二人みたいにIS歴が長いわけではないから何ともいえないだろうけど――」

「頼む衛。お前だけが頼りだ」

「あはは……じゃあ今度一緒にやろうか」

「おう! サンキュー!」

「衛さんの訓練! わたくしも参加してもよろしいでしょうか!?!」

一夏を誘ったら何故かセシリアさんも食い付いてきた。でも今更



僕たちがやるような訓練を彼女はとうの昔に終えている筈だけど。

「え？いい、良いけどセシリアさんには合わないと思うよ？初歩的なものばかりだし」

「何を言いますの！何事も基本は大切ですわ！是非とも参加させてください！」

「そ、そうだね。確かに基本は大切だね。分かった、セシリアさんも一緒にやろうか」

「ありがとうございます、衛さん！」

「……」

これでセシリアさんも参加決定。折角だから僕もわかる範囲でセシリアさんからコツを教えてもらおうとしよう。持ちつ持たれつの関係は素晴らしいものだ。

けれどまだ一人残っている。

「篠ノ之さんもどうかかな？同じ打鉄を使っている人同士、お互いの動きに対する意見交換も出来ると思うんだけど。僕は助かるかな？」

「……いいの？」

「勿論」

「……ならよろしく頼む」

「うん。よろしくね」

これで無事篠ノ之さんもメンバー入りだ。これでやれることも増えるだろう。まあ結局今日はアリーナの使用許可を貰えてないから後日になるんだけど。

「おりむー達が強くなれば、代表戦も簡単だね」

「そうだよね！織斑君なら余裕だよ！」

「そうそう！一年の専用機持ちのうちらだけだし！」

「その情報、古いよ」

「ん？」

クラスメイトたちの盛り上がる声に釘を刺すように、ここ最近聞いたことのある声が聞こえた。具体的に言えば昨日ぶりだ。

視線を声の方向へ向けると、扉に背中を預けて謎のポーズを決める鈴さんがいた。彼女は壁や扉に背中を預けるのが好きなのだろうか。

それともエンターテイナー魂でもあるのかも知れない。

「おはよう鈴さん。昨日ぶりだね」

「へ？あ！衛じゃない！昨日はありがと。助かったわ」

「どういたしましたして。困った時はお互い様だよ」

「鈴!?鈴じゃないか!?久しぶりだなあ!」

「ええ！久しぶりね一夏!」

鈴さんの姿をみた一夏が嬉しそうに声を掛けると、鈴さんもニカツと笑って再会を喜ぶ。そして篠ノ之さんとセシリアさんの機嫌がやや低下する。しかしそれを僕の友人が気付く筈もない。

「一体どうしたんだよ、こんなところまで来て」

「あんたがISを動かしたって聞いたから、あたしもわざわざ中国から来てやったのよ!」

「一夏、あいつは誰だ?」

「一夏さん、あの方はどなたですか?」

「あ、それ僕も気になる」

何となく僕も一夏と鈴の関係が気になって二人に便乗してみる。すると一夏ではなく、鈴さんが胸を張って宣言した。

「あたしは一夏の幼馴染みで、鳳鈴音よ!」

「……なんだと?」

「へー、そうだったんだね。あれ?でも一夏の幼馴染みって篠ノ之さんじゃなかったの?」

「ん?箒はファースト幼馴染みだ。鈴は箒が転校してからうちの学校に転校してきた、セカンド幼馴染みなんだ」

「まあ、それはそれは……」

一夏はのんびりと答えるものの、篠ノ之さんの「なんだそれは?聞いてないぞ?」と言わんばかりの視線で一夏を睨み付けている。

「それにしても、衛は一組だったのね。少し残念だわ。でもクラス代表戦ではあんたと戦えるのよね?楽しみだわ」

「ううん。僕はクラス代表じゃないよ。一組のクラス代表は一夏だよ」

「……へ?衛じゃないの?あんなに一生懸命訓練してたのに?」

「うん。僕じゃないよ。僕のあれはただの自主訓練なんだ」

鈴さんは瞳を大きく見開いて驚くと、次は一夏に対して視線を向ける。

「で？一夏は？あんたクラス代表なんだからしっかり訓練してるんでしょ？」

「あー、まあ、してると言えばしてるかな？」

「はあ？何よそれ。あんたはもうちよつと衛を見習った方が良いわ。普通逆じゃない」

……少し文句を言いたそうにしている鈴さんに声を掛けてあげたものの、彼女の後ろにいる人物からの無言の圧力が怖すぎて声を掛けられない。なので仕方なく声を出さずに口パクで鈴さんに教えることにした。

『鈴さん。早く戻らないと大変な事になるよ』

「……ん？何よ」

なんとか気付いてくれた鈴さんに後ろを見るように少し指示を出す。鈴さんは不思議そうにしながらも後ろを振り向く。

そこにいたのは世界最強の戦乙女だった。

「ふん、命拾いしたな。さっさと自分のクラスに戻れ」

「千冬さん!？」

「織斑先生だ馬鹿者」

織斑先生の出席簿アタックが見事鈴さんの頭を捉え一撃を加える。やはりいつ聞いても違和感しか感じない程の威力を誇る出席簿アタックを受けた鈴さんは涙目になりながらも此方に振り返り、口パクで『ありがとう』と言って自分のクラスに戻っていった。

「さて、小鳥遊。お前も同罪……と言いたい所だが、普段の授業態度に免じて今回は見逃してやろう」

「あ、ありがとうございます。織斑先生」

危なかった。普段の行いは己の身を助ける大切なものである。

「諸君、おはよう。さっそくHRを始める。さっさと席に着け」

織斑先生が来たことにより今まで騒がしかったクラスメイト達も何も言わずに素早く席に戻っていく。

これが織斑先生の英才教育のたわものである。

こうして今日もまた何とはなしに授業が進んでいくのだった。

## ちよつとした騒動、傷付いた心

突然だけど、僕は泣いている女の子を慰める術を知らない。僕の隣で泣いているのは朝にも挨拶を交わしたツインタールの女の子、鈴さん。

朝の時とはうって変わって凄く落ち込んでる彼女を見つけたのは偶然だった。ランニングを終えて水分補給をしようと自販機を探していた所に、泣いている鈴さんを見つけたのだ。

放っておくのも出来ないので本人の許可を得て隣に座っている。でも肝心の掛ける言葉が思い当たらない。

と、とにかく聞いてみるしかない。

「……何かあったんだよね？僕で良ければ話を聞くよ」

「……………」

無言のすすり泣き。勇気を出して踏み込んでみたは良いものの、失敗した感が凄い。まるで僕が泣かせてしまったみたいだ。

(えっと！えーっと！母さんはどうやって泣いてた僕を慰めてくれたんだっけ!?……そうだ！思い出した！)

「泣かないで、鈴さん。今は僕が側にいてあげるから」

「……………」

そのまま鈴さんの頭を優しく撫でる。鈴さんは一瞬ビクツとするも嫌がることはせずにされるがままだった。

そうそう確か僕も昔はこんな感じに――

って相手は女の子だよ!?!根本的に男性と女性じゃ全然違うんじゃないかな!?!それにぼぼ僕鈴さんの頭を勝手に撫でちゃってるし!?!

「あ、あー(ぎゅ)ぎゅ(ぎゅ)めん鈴さん!」

「……………ふふっ。なんで慰めてるあんたがそんな反応してるのよ」

自分の顔が真っ赤になっていくのが分かり、慌てて鈴さんに謝ると鈴さんは目元を赤くしながらも、少しだけ笑顔を取り戻してくれた。

少なくとも自分がやったことは無駄ではなかった事に一安心する。

滅茶苦茶恥ずかしいけど。

「……ありがと、衛。話さ。聞いてくれる？」

「……うん。僕で良ければ」

「実はさ——」

鈴さんから事の顛末を聞いた僕は頭を抱えていた。原因は主に一夏。まさかそれほどまでに鈍感だとは思わなかった。

……いや、今までを振り替えてみればそう思える瞬間がいくつもあつた気がする。篠ノ之さんの機嫌が悪い時も理由をよくわかつていないみたいだし。

と言つても僕も敏感な方ではないから、あんまり一夏の事を強く言えた訳じゃないけど。

それでも鈴さんの「毎日酔豚を作つてあげる」なんて台詞は僕でも告白であることが分かる。告白と分からなくても流石に自分に気があることは最低でも分かるはずだ。

「流石にこれは鈴さんの気持ちは分かるな……」

「でしょ!?!もう何なのよ!あの朴念仁!!」

「……ごめんね。僕の友達が鈴さんを傷付けたみたいだ……」

「なんであんたが謝るのよ。あんたは全然悪くないじゃない。むしろ感謝される側でしょ」

そうかも知れないけど、流石にそういう前兆があつた以上僕も一夏にそれとなく言うべきだったのでは?とは思う。それでも鈴さんの心遣いは嬉しいものだ。

「はー!すつきりした!本当にありがとね衛!話したらスッキリしたし、俄然一夏をギャフンと言わせたくなってきたわ!」

「あはは、それは良かったよ。でもあんまり無理はしないでね。何かあればまた相談に乗るからさ」

「それじゃあその時は是非ともお願いするわ。それじゃあまた明日

！」

「うん。また明日ね」

元気になった鈴さんは笑顔で手を振って居なくなっていた。鈴さんが回復してくれて良かった。

『パパ、無理しちゃダメって人の事言えないよ？』

『手厳しいね、打鉄……』

今日も無事に何とか一日を終えられそうである。

## V S 甲龍 一夏の苦戦

クラス代表戦当日。アリーナの観客席は生徒達で溢れ返っていた。勿論僕も観客席に座ってクラス代表戦を観戦している。僕の隣には本音さんが座っており、相も変わらずホワホワとした不思議な雰囲気纏いながらもワクワクを押さえきれない子供のように目を輝かせている。

一試合が終わった次の試合はまさかの鈴さん対一夏の組合せだ。何か作画的なものを感じるほどの運命力である。あと今回は悪いけど鈴さんを応援させてもらおう。

「まさかあんたとすぐに戦えるとはね。ちゃんと強くなったんでしょね」

「当たり前だろ。鈴を倒すために俺だって衛たちと訓練してたんだからなー」

「ふーん。衛と、ねえ……それなら期待しようかしら」

「なんか癩に触る言い方じゃねえか」

「んー、別にー?」

………なんだろうか。既に空気がピリピリしている。

それと僕と訓練したのはあくまで基本であって一夏がそれだけで強くなったかと問われても、僕は「はい、強くなりました」なんて言えないよ。

ん? 鈴さんがチラチラと僕の方へと視線を向けてきている。その視線が何を意図しているのかは分からないので、取りあえず笑顔で小さく手を振り返してあげた。

「……ふふ」

「なんだよ、いきなり笑い出して」

「別に。ただ応援してくれる人がいるって確認できただけよ」

「なんだよ。そりゃ鈴のクラスメイト達は鈴を応援するのは当たり前前だろ?」

「……もしかするとクラスの子達よりもやる気が出るかもね?」



鈴さんの最後の言葉は僕にも聞こえなかったけど、一夏にもどうやら聞こえてなかったみたいだ。

『むー……』

『どうしたの？』

『……ばか』

『いきなり酷くない？』

何故か打鉄に罵倒された。心が痛い。

「それじゃあさっさと始めますか！あんたに勝ってちゃんと謝らせてやるんだから！」

「俺だつて負けねえよ！理不尽なことで怒られて堪ったもんじゃないからな！」

一夏……それに関しては君が悪いよ……うん。

鈴さんが突如不意打ち気味に両肩の武装から見えない弾丸を放ち、一夏は反応しきれずに被弾してしまう。

そして鈴さんの攻撃が引鉄となり、互いにアリーナの空を飛び回り始めた。

さて、ここでせつかくだから鈴さんの専用機についておさらいしよう。

鈴さんの専用機は近接戦型のIS、甲龍。コンセプトは他の第三代型よりもエネルギー効率に差をつけるというもの。それ故か元々の機体性能自体がハイスペックになっている。

遠距離武装は両肩に浮いている衝撃砲と呼ばれる武装、龍砲が二つと腕部に小型の衝撃砲である崩拳が二つ。

近接武装には連結可能な大型ブレード、双天牙月が二つ。

甲龍に用いられているインターフェース武装が衝撃砲であり、これはISが飛ぶためのシステム——PICを応用して考えられた特殊武装だ。撃ち出すのは文字通り衝撃波であり、重力操作系の武器に類する。しかも威力の加減が可能で、一撃の火力を上げる単発使用と威力は低いもののマシンガンのように連射可能な連発使用が可能となっている。何よりエネルギー兵装ではない為に他の第三代と比べ圧倒的にエネルギー効率に優れている。その為持久戦においても

優秀だ。

けれど欠点として二つ。一つは優秀すぎる近接型の為に遠距離型との相性がすこぶる悪いという点だ。

衝撃砲は砲身が無い分好きな角度で透明な弾丸を撃ち出せる優秀な武装だけど、何分射程距離が短い。大型の衝撃砲でこれなのだから腕部武装である小型の衝撃砲では射程距離などほぼゼロ距離に近いだろう。

けれどこの欠点はあくまで遠距離型との相性の話であり、そもそも相手が似たような近接型である場合はその限りではない。

「くそっ！全然見えねえ！どうなってんだあれ!？」

「あはは！いい様ね一夏！衛と訓練しておいてその程度なの!？」

「くっ！んなわけあるかあ!？」

一夏は我武者羅に鈴さんの懐へ潜り込もうとするけど、その度に龍砲が一夏を襲い攻め辛くしている。そして一端距離を取ろうとすれば逆に鈴さんが急接近して双天牙月を振るわれる。完全に鈴さんのペースに持つていかれている。

そして肝心な二つ目の欠点。これに一夏が気付かなければ鈴さんに勝利するのは難しいだろう。

「ねえねえもーくん、これっっておりむーに勝ち目はあるのかなあ？」

「正直厳しいと思うよ。相性的にも良いとは言えないし、何よりI Sを動かしてきた時間が違いすぎる。話に聞けば一夏の専用機、白式はエネルギー効率が悪すぎるし完全に初見殺し用の機体だと思う。それに対して鈴さんの専用機、甲龍は第三世代の中でもエネルギー効率に主眼を置いた機体なんだ。得意の一撃必殺を決めようにも衝撃砲のせいで上手く間合いを詰められないし、被弾することで一撃必殺も打ちにくくなってどんどん不利になっていく。持久戦に持つていかれている時点で一夏の勝率は限りなく低いものになってると思う」

「ほえ、もーくん凄いな。どんどん言葉が出てきてるよ。それじゃあおりむーはもう勝てないのかな？」

「どうだろうね……でも、一夏にもまだこの状況を覆す方法があることは確かだよ。問題は一夏がそれに気付けるか、だけど……」

駄目だ、全然近付けねえ！あの見えない弾丸が辛すぎる！

何とか空を飛び回りながら距離を詰めようとするが、ことごとくあのヘンテコな武器で邪魔をされる。零落白夜さえ当てられればこっちの勝ちなのに、肝心の距離が詰められないのがもどかしくて仕方ない。

しかもこっちが距離を取れば鈴の方から逆に距離を詰めてくるからやりにくい！

「ほらほら一夏！そんなんじゃあたしに勝てないわよ！」

「ああもう！せめてあの弾丸さえ見えれば！」

とは言うものの、目に見えないものをどうやって見ろというのか。見えないのに見るなんて出来るわけが——

(待てよ？じゃあなんで鈴は的確に俺に向けてあの見えない弾丸を当てられるんだ？どっからどうみても砲身なんて見当たらないし)

ふと注意深く鈴の動きを見てみると、僅かにだが違和感がある。感じた違和感の先は——鈴の視線だ。

……試してみる価値はある。どちらにせよこのままじゃ勝ち目なんて無い。なら分の悪い掛けでもやってみるしかない。

「なあ知ってるか鈴。俺のワンオフアビリティ」

「いきなり何よ。知らないわよそんなもの」

「じゃあ教えてやるよ。俺のワンオフアビリティは零落白夜。当たれば一撃でSEを全部持っていく俺の必殺技さ」

「……へえ、そりゃヤバイわね。でもそれは当たらなければいい話じゃない」

「ごもつとも。でもな鈴、これでお前は嫌でも俺の零落白夜を警戒せざるを得ない筈だ。なんせ一撃必殺だ。誰だってそんなものチラつかされれば警戒するだろうさ。」

「さあ行くぜ！鈴！」

「ボッコボコにしてあげるわ！」

さあ仕切り直しだ！

『パパ！お外から何か近付いてるよ！』

『近付いてる？一体何が……？』

『わたしとおんなじ——でも知らないISS！高速で接近してるの  
！』

『!?』

ここまで打鉄が動揺しているということは、未確認機である可能性  
が高い。

周りを見ても誰一人気付いてはいない。先生方もだ。

伝えればこの戦いは中止になる可能性が高い。

……それは二人の為に避けたい。なら選択肢はひとつだけ。

『行こう、打鉄』

『……うん！』

僕は気付かれないようにそつと席からいなくなった。

V S U n k n o w n く燃え羽ばたく不死鳥く

アリーナから一番近い中庭へと出て、打鉄を展開する。

本来ならISの無断使用は御法度だけど、今はそんなこと言っていない場合じゃない。

急いで未確認機の元へ向かうと、上空から確かに接近してくる影が見えた。しかも相当速い。このままでは間に合わない。

「打鉄！朱雀はいける？」

『えつと……うん！大丈夫！』

打鉄に確認したのは装備がアンロックされているかどうかだ。実は東さんに渡された装備は四つであり、玄武の他に朱雀・青龍・白虎という装備がある。そのうち最初からアンロックされていたのは玄武だけだった。今は朱雀がアンロックされているみたいだけど、未だにアンロックの条件は分かっていない。

アンロックされた朱雀を展開すると、玄武とは違い真っ赤な装甲が打鉄に装着されていく。そして背中に巨大な機械の翼が装備された。動かし方は何となく分かる。

確か東さんから受けた説明では朱雀は速さに主眼を置いた装備らしく、両翼にそれぞれ個別にエネルギーを保管出来る為高速で移動する際に本体のエネルギーを殆ど使う必要は無いそうだ。

「ぶつつけ本番だけど……やるしかない！」

『サポートするねパパ！』

両翼のエネルギーを放出して未確認機へと高速接近する。すると近付いていくにつれてその姿が鮮明になっていく。

全身が真っ黒で、背中にはブラスターがついている。そしてその腕には何かを、否ISをぶら下げている。そのISは体には見合わないほど巨大な腕をしており、どちらのISもフルフェイスのせいで表情は伺えない。

「二人か……流石にキツイな」

『どつちも知らないコアだよパパ！それになんか変な感じがする……』

「変な感じ？・兎に角接触しないことにはどうにもならないね……」

そのまま未確認機へと接近し、進路を塞ぐように彼女らの前に立ち塞がる。すると彼女らはその場で停止して、無機質なフルフェイスのセンサーアイで僕たちを見つめてくる。

「ここはIS学園の敷地です。無断侵入は許されません。すぐに撤退してください！」

『……………』

「くっ！」

撤退勧告をするものの、彼女らは何も言うことはなくいきなり攻撃を始めてきた！

ぶら下がっているISが両腕の射出口からビームを撃ち出してきたのを間一髪で避けることには成功したが、あの威力は正直ヤバイ。玄武なら受けきれぬだろうけど、朱雀で食らえば致命傷は免れない。かといってここで玄武に切り替えてもブースター装備のISに追いつけない。

このまま朱雀で戦うしかないか……！

「行くよ打鉄！時間さえ稼げればいい！」

『分かった！やろうパパ！』

高速機動ウイングユニット、朱雀のエネルギー量はまだまだ余裕がある。兎に角彼女らの進路を塞ぎつつ行動を妨害する！

ブースター装備のISからミサイルが飛来するが、それは初期装備である打鉄のシールドで防ぐ。この程度ならまだ初期シールドで大丈夫だ。となるとやっぱり警戒すべきはビーム装備のISだ。でもビーム装備のISばかりに気を取られているとブースター装備の方から攻撃をもらってしまう。やはり2対1は辛い。相手の思惑が分からないのも不安だし、何より恐怖感が凄まじい。

三度撃ち出されるミサイルをシールドで防ぎつつ、なるべくビームの射線に入らないように立ち回らなければならぬ。どんどん朱雀のエネルギーが思いの外すり減っていく。このままじゃ朱雀のエネルギーが先に尽きるかもしれない。

相手は明確な敵意を持って攻撃してきているのだろう。その攻撃

の威力と今回の奇襲でそう思える。

訓練ではどうにかなくても、これは殆ど実戦だ。試合なんて優しいものではない。

「くそっ！くそっ！止まれ！止まってくれ！」

『パパ！パパ！落ち着いて！』

彼女らの攻撃が僕を掠める度に恐怖で体が震える。

機動がおぼつかない。嫌な汗が吹き出る。

動悸が激しくなる。視界が揺れる。

無機質な瞳が僕を貫く。感情は読み取れない。

怖い……怖い、怖い、怖い！

「はあ……はあ……！」

『パパ!!』

目の前に先程の高威力のビームが迫ってくる。

当たれば撃墜されるのが目に見えている。でも体が言うことを聞かない。

打鉄の焦ったような悲鳴が聞こえる。死の感覚が身近に感じる。

僕には荷が重かったのだろう。所詮はなんの取り柄もない面白くない人間だ。こんな終わり方でも不思議じゃない。

もう僕は――

『パパ……諦めないで……守ろう、一緒に。力の、兵器の使い方はパパ次第なんだよ。怖がらないで……わたしも一緒だから！』

「っ!!」

声が聞こえた。優しくも力強い声がしつかりと、僕の耳に届いた。  
「負けるかああああ!!」

恐れはもう消えた。やるべきことも、力の使い方も見えた。ならあ  
とは僕次第だ!

迫り来る高威力のビームに向かって右手を開いて突き出す。朱雀  
はただ打鉄を高機動にするために作られた訳ではない。

飛来するビームを右手の平で受け止めると右腕の腕部装甲が可変  
して開き、受け止めたエネルギーを両翼へと供給していく。すり減っ  
ていたウイングユニットのエネルギー残量が瞬く間に回復し、貯蓄上  
限を越える。

すると頭の中にアンロックの文字が流れた。

『ストライカーモードのアンロックを確認!両翼展開!オーバーロー  
ド開始!』

打鉄の宣告と共にウイングユニットの装甲が開き、貯蓄限界を迎え  
た膨大なエネルギーを放出し始める。

その様はまるで陽炎が揺らめくかのようだ。

「機能さえ停止させられればいい!今だけでも僕に力を貸してくれ、  
朱雀!」

『——良いでしょう——』

何者かの声が聞こえたと同時に、ハイパーセンサーに目の前のIS  
の情報が表れる。そこに素早く目を通していくと、衝撃の事実を知っ  
た。

「無人機だって……!?でもそれなら、エネルギーさえ切れれば止まる  
はず!」

スラスターを全開で吹かして無人機と思われる2機に残像を残し  
ながら高速で接近する!

ブースター装備の無人機がすぐに距離を取ろうとするが、それすら  
も許さない程のスピードを駆使して追いかける。



ビーム装備の無人機が僕を撃墜しようとして二連装のビームを放ってくるが、ビームが捉えるのはことごとく朱雀が作り出した残像だ。

「もう食らわない。大人しくしてくれ!」

2機の後ろに回り込んでビーム装備の無人機に掴み掛り、エネルギーを奪取する。再びウィングユニットから有り余ったエネルギーが放出され、本来のウィングユニットよりも大きく見える。

エネルギーを奪取しつくすと、今までとは違ってかわって力なく腕をだらりとさげ動かなくなった。やはり朱雀の情報通り無人機で間違いない。違い無さそう。

もう1機にも手を伸ばそうとしたとき、脳内で無数のアラート音が鳴り響く。それと同時に激しい頭痛が突如僕に牙を剥いた。

「がっ、あああああ!!?」

『パパっ!! ストライカーモード解除!! オーバーロード停止!!』

『——所詮は人の子ですか——』

忙しなく鳴り響いていたアラート音が収まり、ゆっくりと頭痛が引いていく。いつの間にか開いていたウィングユニットは既に閉じており、ノーマルモードへと移行していた。

慌ててブースター装備の無人機へと視線を向けると、既に2機は戦線から離脱していた。

「く、はあ……逃げ、した……」

『パパ大丈夫!? まだ痛い!』

「はあ……まだ少し痛いけど、大——」

大丈夫と言おうとした時、視界がチカチカして凄い吐き気に襲われる。極度の緊張状態に晒されていたからその反動かもしれない。体がフラついて平衡感覚が取れなくなっていく。

「あ、あれ? おかしいな……」

『パパ……すっごく気分悪そうだよ……』

「あはは……ちよつと疲れちゃったよ……さ、早く帰ろう……」

なんとかアリーナに戻ろうとするけど、思うように体が動かない。動こうとするだけで体が軋み吐き気が込み上げる。

「あつ——」

『っ！駄目！』

打鉄の展開が解けて、そのまま重力に引かれて落下していく。今はこの落ちていく感覚すら鈍く感じる。

勿論死にたくはない。けどもう僕には打鉄を展開し直す元気すら残っていない。

(このまま海面に叩きつけられるのかな……流石にこれは予想外だった……)

身動きが取れないまま諦めて目を閉じる。せめて打鉄だけでも壊れないように小指から外してあげたいけど、それすらも出来ない。

『いやーいやーパパー！っっかりして！』

『ごめんね……』

こうして僕は海面に叩きつけられ――

「はぁ〜い♪いっらっしや〜い♪」

――ることは無かった。

感じたのは堅い海面の感触ではなくて、柔らかくて暖かい感触。

気を失う寸前に見たのは、悪戯っぽく笑う謎の女の子と流れる水だった。

## その後の結末

死ぬかと思った。確かに無人機との戦闘も生きた心地がしなかったけど、それよりも目覚めたら知らない女の子と同じベッドで同衾していた事が一番心臓を痛めた自信がある。

その人物はこのIS学園の生徒会長である更識 楯無さん。

彼女はロシアの国家代表であり、学園最強と言われている。そもそもこの学園の生徒会長は実力で勝ち取るものらしく、学年は関係ないそうだ。

そして恐ろしい程に悪戯好きかつ自由な人だった。年上に遊ばれるというのはどうにも慣れない。しかもそれが女性であれば尚更だ。彼女は僕の心臓に悪すぎる。

後知らない間に僕のケータイに生徒会長の連絡先が載っていたことにも戦慄した。打鉄は凄く機嫌が悪かったのが印象的だ。

因みに僕は一週間の謹慎処分となった。まあ当たり前だけど織斑先生に滅茶苦茶怒られたのだ。出席簿の威力は未だ知らないが、拳骨の威力は気が遠退く位には威力が高いということは身をもって知ることができた。

それでも一週間の謹慎処分で済んだのは一重に一夏や鈴さん、本音さんといった僕と仲良くしてくれた人たちの協力の成果らしい。特に鈴さんと一夏は強く掛け合ってくれたそう。今度しつかりお礼しなければ。

ああ、それと鈴さんと一夏の戦いは結局相討ちだったそう。鈴さんが勝てなかったこともそうだけど、何より一番驚いたのは一夏の成長速度だった。代表候補生と圧倒的に経験の差がついている筈なのに、彼は戦う度に強くなっている。それも恐ろしい程に。彼にはその道の素質があっただろう。

今回の経験を得て、僕は一夏を初めて羨ましく思った。

守るだけでは駄目だ。時には力を振るわなければならぬ時もあると、僕は無人機との戦闘で学んだ。

確かに今でも打鉄やその家族である筈のISたちを傷付けたくは

ないと思っっている。そしてそれがとてつもなく難しいことだということもよく分かった。

実際僕は打鉄を傷付けてばかりだ。どの口がそんなことを言うんだと自分でも何度も責めた事がある。

そんな悩みで打鉄と大喧嘩したときを思い出す。あれは本当にお互いの本音のぶつけ合いだった。

「力の使い方は僕次第、か」

何とはなしに手を伸ばして握りこむ。

初めて攻勢に出た。初めて僕は攻めに回った。恐怖心はあった。傷付くのも傷付けるのも怖かった。

けれど。それよりも怖かったのは――

「僕は……楽しかったのか？相手を傷付けるかもしれないという行為を、楽しんでいたのか……」

あのとき、確かに感じたのだ。生と死の瀬戸際に立たされた時に感じた高揚感。自分が自分では無くなるような、そんな感覚。

僕はあのとき、確かに笑っていたのだ。

「僕は……僕は……」

ベッドの上で体を小さく丸めて目をつむる。打鉄はもう既に寝静まっているので、僕の声に反応するものはいない。

まだ長い夜は始まったばかりだ。

打……鉄……？

最近思うのは、束さんって何でもありだなということだ。もうなんていうか、この人本当に人間かな？って思うことがあるのだ。

例えばそう、昨日唐突に謹慎中の僕の部屋に突撃してきた事とか。いや、ここだけ言えば普通じゃね？って思うかもしれないけど。そもそもここは孤島で尚且つIS学園だ。セキュリティは万全なはずだ。それをいとも容易く突破して来る辺り人間なのか疑わしい。

「久しぶりに1人で過ごすなあ……打鉄大丈夫かな？束さんに変なこ」とされてなきや良いけど」

カリカリとノートに書き綴っていた手を止めて、少しだけ一息をつく。

実は昨日から打鉄は束さんの所に預けられている。何でも打鉄の稼働データが欲しいという話みたいで、打鉄も久しぶりに親子水入らずということ楽しんでしていた。

それと一応無人機の事を束さんに聞いてみたけど、意外なことに束さんは分からないらしい。つまりあれは束さんが作ったものではないと言っているのだ。

つまり束さんレベルの天才が作ったということだろうか？

けどそんな人物がいたら今頃世間が黙っていない筈。表には知られていない人物の可能性がある。といっても別段僕は政治に詳しくもなければそういった技術者なんて知らないので探し用がないのだけど。見つけた所で何が目的か分かってもないし、そもそも僕みたいな一般人がどうするんだって話だ。

詰まるところ、こういうのは上の人達に任せるのが一番である。

織斑先生や束さんにもすっかり伝えだし、今のところは無人機に関して僕のやれることはない。今は少しでも多く知識と経験を積むのが先決だ。尤も、謹慎中の身なので出来ることは殆どないのだけだね。

そして暇をもて余した僕はようやくあのぶ厚い教科書の内容をノートに書き終えることが出来そうだ。

『おーい、衛いるだろ？今大丈夫か？』

ラストスパートをかけていく最中、突如遠慮を知らぬノック音と共に聞きなれた友人の声が聞こえてきた。

「うん。どうぞ」

「お邪魔しまーす。って悪い、勉強中だったんだな」

「まあね。他にすることもないし、嫌いじゃないからつい」

「相変わらずスゲーな……俺だったらすぐに飽きる自信がある」

「そこは自信持ったら駄目じゃないかな」

一夏を部屋の中に入れて、冷蔵庫に入れてあつた麦茶を出してあげ。まだ夏には遠いけど、麦茶はいつ飲んでも美味しいものだ。

「お、サンキュー」

「お茶菓子は無いから我慢してね」

「そこまで贅沢は言わねえって」

二人で麦茶を啜りながら、授業についての話や一夏の友人の話などの他愛のない会話をダラダラと続ける。

でもなんとというか、一夏の過去を聞いているだけでこの朴念仁がどれだけ人の好意に疎いのが分かる。でもまあそれも親御さんがいない家庭で育ったのも原因があるのかもしれない。そんな厳しい環境の中で一夏をここまで育ててきた織斑先生には尊敬の念を抱く。

「一夏。今度しっかり織斑先生にお礼しないとね」

「ああ、千冬姉には迷惑かけてるから……早く楽させてあげたいんだけど」

「その気持ちは分かるよ。僕も母さんに楽させてあげたいと思ってるんだ。だからこそここを無事に卒業して良い会社に勤めるんだ」

「衛なら大丈夫そうだな。俺なんか勉強にすら追い付けなくて卒業出来る気がしないぞ」

「だからいつも君が分からないって言った所は教えてるじゃないか。それで少しずつ出来てきてるんだから、一夏だって大丈夫さ」

「そっか……そうだよな！諦めるのは早すぎるしカッコ悪いよな！俺も頑張るぜ！」

「そうそうその調子！お互いに頑張ろう！」

「おう！」

——その後も一夏と談笑を続けていたが、暫くして一夏を探しに  
来た箒さん・セシリアさん・鈴さんに一夏は捕まって連行されてい  
た。何でも四人でISの訓練をする予定だったみたいだ。彼の周り  
はいつも楽しそうで羨ましい限りだ。

一夏達を見送り、何となく視線を下に向けると無意識か右手の小指  
を左手で握っていた。そこにあつたものは今は何も無い。

「ははっ……意外と寂しいものなんだね」

打鉄と離れてからたった1日しか経っていないのに酷く寂しく感  
じる。いつも聞こえていた華やかな声は聞こえず、そんな日常に違和  
感を覚える。

「……続き、しなきや。何かやってれば気も紛れるだろうし」

再び机に向かい、ノートと教科書を開いてペンを握る。

少しだけモヤツとした気持ちを抱えながらも、ひたすら無心になる  
ようにペンを走らせていくのだった。

夜。誰もが寝静まった夜中に、1人の少年に近付く影があつた。彼  
女は勝手知つたる部屋であるかのようにスイスイと部屋の中を移動  
すると、机に突つ伏して眠っている少年の寝顔を楽しそうに眺める。  
「もう、マスターつたらまたこんなところで寝ちやつてる。ふふ、可愛  
い寝顔♪」

少女はフニフニと少年の頬を指でつついてから、少年をお姫様抱っ  
こで持ち上げる。もし他に見ている人がいれば少女の意外な面に驚  
いていたであろう。

「わっ、とと。やっぱりまだこの体に慣れないなあ。でも徐々に慣れ  
ていかない！」

少女は小さく声をあげると、少年を軽々とベッドまで運んでいき

ゆっくりと下ろしていく。

幸い少年は起きることはなく、気持ち良さそうにスヤスヤと眠っている。

「あつ、そーだ。せつかくだから……」

少女は何かを思いついたのか、少年を少し動かして1人分のスペースを確保する。顔は暗闇で見えにくいがほんのりと赤く染まっている。

「よし、それじゃあお邪魔します……」

そう言うやいなや、少女は少年と同じベッドに潜り込んでキュツと少年に抱きつく。少年から感じる熱と匂いに少女は嬉しくなって、少年の胸元に顔を埋める。

「あつたかい……これが人の温もりなんだ……」

それは今まで少女が感じる事が出来なかった事であり、彼女の希望を聞き入れた母親が起こした奇跡の賜物である。娘の夢を叶える為に全力を尽くした母親の天才的頭脳は最早測定不能なレベルである。

「おやすみなさい……マスター……」

少女もとうとう睡魔に堪えられなくなり、そつと瞳を閉じる。トクントクンと聞こえてくる大好きな人の心音を感じながら、少女の意識は落ちていった。

「ん……なんだ……?」

朝。妙に柔らかくて暖かい感触を感じた僕は未だ焦点の合わない寝ぼけ眼で原因を探る。

おかしい。僕は昨日机の上で寝落ちしてしまった筈だ。それなのに僕はベッドの中にいる。無意識にベッドまで歩いてきたのだろうか?

……いや、それはない。何となくだけど、原因は今まさに近くにあ



る気がする。

そこで思いきって違和感を感じる布団を剥ぐと、僕はそこにある光景に一瞬息をのみ、すぐに顔に熱がこもっていく。

「な………ななな………」

「んー……ふえ……？あー……ますたー、おはよー……」

そこにいたのは、見たこともない美少女だった。

雪のような白い肌に綺麗な銀髪、エメラルドのように透き通った瞳、そして女の子特有の甘い香り。控えめながらもしっかりと感じられる柔らかい胸の感触。

ぶっちやけ脳内と顔がオーバーヒートを起こしそうだ。

「ってマスター……？……もしかして打鉄、なの？」

「うん。ただいま、マスター♪それともやっぱりパパの方が良い？」

「え？………ええええええええ!？」

目覚めの朝。僕への寝起きドツキりはあまりにも心臓に悪すぎたのだった。

### 3つの問題、早すぎる疑い

どうしよう。非常に困った。

現在僕が突き当たっている問題は3つ。

1つ、織斑先生に僕と束さんに接点があるという事がバレた。原因は打鉄を見た僕の悲鳴。ISが擬人化してたらそりや束さんが疑われる。

これで織斑先生によつて学園内のセキュリティは一層強化され、束さんが侵入しにくくなっただろう。そしてついに僕も織斑先生に目をつけられた。迂闊なことは出来ない。いや、命が惜しいから変なこととはしないけど。

2つ、打鉄が前の待機状態になれなくなった。今までは指輪の形態が待機状態だったけど、擬人化による副作用なのか人状態が待機状態になっているみたいだ。因みに打鉄の展開は普通に出来たのでそこは心配ない。しかし何処に行くにしても大抵は打鉄と一緒に行動しなければ行けない。でなければ僕はISを所持していないただの貧弱なモルモットと成り下がるからだ。

そして面倒な事に、人状態の打鉄がISだとバレないようにしなければならなくなった。

当たり前だけど人状態のISなど知られてしまえば、国の頭の人達がこぞつて欲しがるに違いない。それこそ解体してまでも仕組みを解こうとする輩だつて現れるかもしれない。

そうなると僕の命も危ないので、打鉄の擬人化は極秘事項扱いとなった。けどどうしても学園に一緒にいる以上生徒達にも隠し通せる訳はないので、知ってしまった人には織斑先生からの嚴重注意が飛んでいく。

まあなるべくは人前での打鉄展開は控えようと思う。クラスメイトには織斑先生が予め伝えておいた。授業とかで必ずバレるしね。クラスメイトには。

後、擬人化に成功した打鉄は最近気分が上々である。

そして3つ。これが一番の問題だ。

「……………」

「……………」

僕の部屋には今現在僕と打鉄の他にもう1人いる。

それが今向かい側のベッドに座って黙りコクっている金髪のイケメン外人さん。

名前はシャルル・デュノアさん。

今日転校してきたばかりで、なんと三人目の男性パイロット！

——となっっているみたいだけど。

「……シャルルさん。1つ質問いいかな？」

「な、何かな？小鳥遊君」

「君、女の子だよね」

「っ!？」

確信を突いた僕の質問にシャルルさんは明らかに狼狽している。本当に隠す気があるのかな？この人。今ので狼狽えたら自分で証明してるようなものだと思う。

「な、何を言ってるんだい？僕は正真正銘男だよ？」

「……………」

「……………」

無言でシャルルさんを見つめると、シャルルさんの額からツーツと一筋の冷汗が流れる。目も僕に合わせる事なく宙をさま迷わせてるし、嘘をつくのが苦手なのだろう。

別に訴えるつもりはないのだけど。本当にシャルルさんが女の子だとしても別に僕がどうのこうのする問題でも無いだろうし。

「……まあいつか。これから宜しくね、シャルルさん」

「う、うんー……こちらこそ宜しく、小鳥遊君」

二人でぎこちなく（シャルルさんだけ）握手を交わして、取りあえず今日の所はスルーすることにした。

本当に必要な織斑先生にでも話してみよう。

???

円卓を囲むように男女が席につき、重苦しい空気が部屋を満たす。所々空席はあるものの、彼等はそれをさも当たり前のように気にすることは無い。

皆一様に黒いフードで顔を隠しており、誰一人として特徴が掴めない。

「それで、この前のリッター・ドール共の成果は？」

「重畳——と言いたいところですが、残念ながら妨害を受けてしまいました。織斑一夏の戦闘データは回収出来ませんでした。代わりとっては何ですが、あの一般人の少年の戦闘データなら——」

「そんなものは必要ない。たかだかそこら辺の有象無象のデータなど捨てておけ」

「あら、じゃあ私とそのデータ貰いますね」

男が捨て置けと言ったデータを欲しがる謎の女。そんな女に彼等は怪訝な目を向けながらも、どうせ捨てるデータだからと提供する事を認めた。

この女の考えていることは彼等も未だに解りきってはいないのだ。

「けっ！わざわざ試作コアを贅沢に使ってまで差し向けたのに、得られたのはゴミ箱行きのデータだけかよ！ほんとにお前のところはつかえねえなあおい！」

「その試作コアだってこちらで用意したものですし、君の専用機だってそのコアで成り立っているんですよ。君みたいな戦闘しか出来ない猿にとやかく言われる筋合いはありませんね」

「んだとテメェ！」

「やめろ。見ているこちらが不愉快だ」

突如言い合いを始める2人の男に、1人が落ち着いた声で喧嘩を諫める。すると若い男は大きく舌打ちをしてドカツと卓の上に足を乗せる。そんな姿にもう1人は顔をしかめるも、何も言わずに鼻を鳴らすだけであった。

女はそんな彼等を視界に入れながらも、後で得られる少年の戦闘

データの事しか頭になかった。それほどまでに彼等の言い争いは日常茶飯事であり、彼女にとって至極どうでもいいことなのだ。

「福音の件はどうだ。ちゃんと仕込めたんだろうな？」

「それは問題ありません。滞りなく進行中です。これなら福音の起動実験に充分間に合います」

「ならばよし。亡霊のほうはどうしている？」

「それならうちの子がすっかり情報を集めてます。狙い目はあれらが織斑一夏を狙った時、で良いかと。あ、その際にもう1人の少年に接触しても構いませんよね？私彼に興味があるんです」

「構わん。ただし最小限にしろ。過度な接触をする必要はあるまい」

「分かっていますよ。それじゃあ私はこれで失礼します。代表候補としてのお仕事はまだ残っているので」

「うむ。何か動きがあつたら随時連絡しろ」

「はいはい」

女はつまらない会議に飽きて適当に嘘をつくど、足早にその場を離れていく。

権力と力に目が眩んだちんけな男達との会話を苦痛としていた彼女だったが、この会議にでて得られたものは確かにあった。

「小鳥遊 衛くん、か。わたしには彼の方がよっぽど不思議だけだね」

後に流れてくる彼のデータを楽しみにしつつ、彼女は観光へと赴いたのだった。

## 発覚

なんというか、シャルルさんとボーデヴィツヒさん（もう1人の転校生）が来てから僕の苦労が増えた気がする。

シャルルさんは相も変わらず性別をひた隠しにしており、時々危険な場面があるものの未だ皆には気付かれていない。だけどこのままじゃ時間の問題だろう。

ボーデヴィツヒさんに至っては転校初日に一夏を打っているし、今もなお一夏の事を目の敵にしている。でも織斑先生にはゾツコンなんだよね、彼女。一体何をやらかせば見知らぬ女の子からあれほど嫌われるのだろうか。

一夏も覚えは無いつて言ってたし、これについては謎だ。

因みにシャルルと同室になってからは彼（彼女？）にISの動かし方について教えてもらっている。特に高速切換——ラピッド・スイッチのアドバイスは僕にとってはお宝その物だった。それにシャルルさんの専用機であるラファール・リヴァイヴも僕の打鉄と同じ第二世代機なので色々学ぶことも多い。何よりシャルルさんは教え方が上手い。こちらが分からなかった所があればすぐに噛み砕いて説明してくれるし、実戦形式で手取り足取り教えてくれるので理解しやすくて助かる。シャルルさんという山田先生といい、ラファール乗りは皆教え方が上手いのは何故だろう。

『パパ！4時の方向！数は3！』

「了、解！」

放課後、いつものようにアリーナの使用許可を貰っていた僕は相変わらず多数の練習用ビットを使って訓練をしている。だいぶ動きにも慣れてきたので現在のビットの強さは5段階中の3レベルを設定している。

因みにレベル1が停止状態、レベル2が訓練機と同じくらい、レベル3が平均、レベル4が代表候補生でレベル5が国の代表候補レベル

だ。今まではレベル2で訓練していたのだけど、先程言った通りだ  
ぶ動きにも慣れてきたのでレベルを一つ上げたのだ。

飛来するビットの数はおおよそ10機に対して、こちらは僕1人。  
無謀にも思える数だがこれくらい凌ぎ切れなければ話にならない。

『次は9時の方向に3機！続いて3時の方向に4機！』

「ぐっ、キツっ！」

無人機襲撃からその後、朱雀は再びロックされてしまい今なお使え  
るのは玄武のみだ。玄武の防御力は要塞と言えるレベルだが、流石に  
今までよりも高速で空を飛び回るビット10機には辛いものがある。

こちらの装備は打鉄の基本装備であるシールド2つに玄武の大型  
シールド4つの計6つだ。常に玄武の装甲を纏いながら戦うのは異  
常に体力を消耗する。

左右の攻撃を防ぎきり残り3つのビットを探そうとしたとき、後ろ  
から3つの光線が僕に直撃した。

「あぐっ！」

『3発被弾！残り2回だよパパ！』

「わかつ、てる！」

再び動き出した10機のビットを視界に捉え、イグニッション・  
ブーストを使いながら被弾を抑えようとする。

『同時攻撃くるよー！』

「！」

正面から飛来する光線を大型シールドで弾くが、囲うように回り込  
んできたビット達がそれぞれ少しタイミングをずらしながら死角を  
狙って狙撃してくる。

シールド全てを使いながらブーストし、限界まで体を捻る。光線6  
つを無力化し、胴体ストレスを2つの光線がカスるが被弾判定にはな  
らない。しかし飛んできたのは計8つのみ。

「残り2つは……!!？」

『パパ！6時の方向だよー！』

「っ!？」

打鉄の声にハイパーセンサーで後方を確認すると、発射寸前のビツ

トが2機。シールドを後方に回すのは不可能。姿勢も安定せず、これ以上の回避手段は無い。

「ぐあっ！」

『2発被弾！撃墜判定だよ！』

打鉄の宣言と同時に10機のビット達が攻撃を止め、それぞれの場所へと戻っていく。体がフラフラするが、何とか陸に着地して打鉄の装備を解除する。すると打鉄がフラつく僕の体を支えるように肩を貸してくれた。

「もう！慣れてきたからっていきなりレベル3を10機同時なんて無謀だよ！」

「ははっ、そうみたいだね。でもこれくらいなら——」

「小鳥遊 衛！今のはなんだ！」

声のした方へと顔を向けると、驚いた表情でこちらを見ているボーデヴィツヒさんの姿があった。

まさかこんな時間にアリーナに来る人がいるとは思わなかった。

「やあ、ボーデヴィツヒさん。何って？」

「ISが人になるなど聞いたことがないぞ！」

「あちやー。しっかり見られちゃったよパパ」

「あー……」

「答えろ小鳥遊 衛！それはなんなのだ!？」

ボーデヴィツヒさんは僕の胸ぐらを掴みながら鬼気迫る顔で睨み付けてくる。確かに打鉄が擬人化したことは驚かせてしまっただろうけど、彼女の反応はそれとは別な何かを感じる。

「ボーデヴィツヒさん。せっかくだから少し話でもしてみない？」

「は？貴様何を言っている？」

「まあまあ。そんなにおかしい事でもないでしょ？それにボーデヴィツヒさんとは話してみたいと思っただんだ。どうかな？」

「……いいだろう」

「ありがとう。それじゃあ行こっか？」

「？何処へだ？」

「落ち着いた所だよ」



今なお表情の硬いボーデヴィツヒさんにニツコリと笑い、打鉄とボーデヴィツヒさんを連れて歩き出す。  
納得してくれば良いけど……。



なあ。

「ん？何故そんなにニヤニヤしている」

「いや、ボーデヴィツヒさんでもそんな顔するんだなって。今までずっと仏頂面だったからさ」

「ほ、放っておけ！私だって人間だ！……そうだ。出来損ないなんかではない」

「……ねえボーデヴィツヒさん。何で君は一夏を嫌ってるの？良ければ教えてくれないかな。勿論無理には言わないよ」

「……良いだろう。お前には教えてやる。あれは教官がドイツを去る前の事だった——」

ポツ、ポツとボーデヴィツヒさんはゆっくりと何があつたのかを話してくれた。

自分の出生や第二回モンドグロッソで織斑先生が優勝目前で不戦敗した理由。ドイツへの借りを返すためにボーデヴィツヒさん達の黒兎隊での教官生活。

そして教官生活最後にボーデヴィツヒさんに話した内容。

それら全てを大切そうに語るボーデヴィツヒさんの姿は誇らしくも寂しそうに見えた。

「——というわけだ。私には未だに織斑教官の言葉の意味が理解出来ない。あんな奴が織斑教官の栄光に泥を塗つたと言うのに！それなのに教官はあいつの話をするとう優しく微笑むのだ！私にもそんな笑顔を向けてはくれないのに……」

「……そっか。そういう事だったんだね」

悔しそうに唇を噛み締めるボーデヴィツヒさんを見て、思わず手を伸ばして頭を撫でていた。

可哀想だとは思ふ。自分を救ってくれた人が特定の誰かの話で笑顔になつているのを見たら僕だって恐らく嫉妬してしまうだろう。でも可哀想だという気持ちよりも尊敬の気持ちの方が強い。

「な、何をしている！」

「赤の他人である僕が言うことでもないと思うけど、よく頑張つたね、ボーデヴィツヒさん。君は凄い人だよ」

「……ふん！お前に何が分かる！私の苦しみの何が！」

「確かにボーデヴィツヒさんのいう通り、僕にはボーデヴィツヒさんの苦しみを全部理解出来ないよ。だって僕はボーデヴィツヒさんではないから。でもボーデヴィツヒさんの環境を考えればそれがどんなに辛い事だったかは分かる。僕だったら途中で生きる事を諦めてたかもしれない。でもボーデヴィツヒさんはそんな中でも織斑先生に師事して貰って、実力をつけてここまで来れた。それは正真正銘ボーデヴィツヒさんの力だよ」

「それは……」

そろそろ打鉄の視線が痛いので撫でていた手を引っ込めると、そのまま視線を逸らさずボーデヴィツヒさんを見つめる。ボーデヴィツヒさんにはまだ戸惑いの感情が見える。

「だから僕はボーデヴィツヒさんを尊敬するよ。だからこそ僕は君を守るための強さを知ってほしい。ただの力じゃなくて、誰かを想う力を。きつとそれがボーデヴィツヒさんを変えてくれるから」

「守るための強さ……誰かを想う力……」

「まあ偉そうに言ってるけど、僕もまだまだそれにたどり着けてないんだ。ボーデヴィツヒさんが良ければ、僕達と一緒に探してくれないかな。きつと僕達じゃ見つけられないからさ」

「………考えておこう」

短くボーデヴィツヒさんが言葉を切ると、少し悩んでいる様子を見せながらもベンチから立ち上りこの場を去ろうとする。

僕はふと聞きたくなかった事があったので、ボーデヴィツヒさんに声を掛けた。

「最後に「ついいいかな？」

「なんだ」

「どうして僕に話してくれたのかなって。ほら、ボーデヴィツヒさんって誰とも話をしようとしなかったから気になって」

「……お前が他の奴等と違うと判断したからだ」

「？それってどういう事？」

「だ、だからお前が他の奴等に比べて信用出来る奴だと判断したから

だ！こんなこと言わせるな馬鹿者！」

ボーデヴィツヒさんは恥ずかしいのか顔を赤くしながら声を張り上げて教えてくれた。

僕としては特にアクションを起こした覚えもないので、一体何が彼女の気を引いたのかは分からない。

「それと私のことはラウラでいい！お前にボーデヴィツヒさんと呼ばれるとむず痒くなる！」

「え？う、うん。分かった。僕のこと衛でいいよ」

「……ふん。さらばだ、衛」

「またね、ラウラさん」

「ばいばい！」

去り行くラウラさんを見送って、殆ど口をつけなかったお茶の蓋を開けて喉に流し込む。

お茶特有の苦味と香りを感じる。ひんやりとした冷たさが心地いい。

「パパ、あの人のコアから変な感覚がする」

「変な感覚？」

「うん。モヤモヤっとして、ネットリとした気持ち悪い何か」

「うん？うーん……それだけじゃ全然分かんないな。取りあえずもう少し様子を見てみようか」

「はーい」

飲み終えたペットボトルをゴミ箱に捨てて、打鉄と手を繋いで部屋へと戻る。

何故かこうすると打鉄の機嫌が良くなるのだ。まあ小さい子供なんかも親と手を繋いで歩いたりするし、感覚的にそれに近いのだろう。

それにしても変な感覚か。打鉄が言うのなら警戒しておかなければならないだろう。後でこっそり東さんに報告しておいた方がいいかもしれない。

## 報告と考察

ラウラさんと話をしてから、彼女は何かと僕に声を掛けてくるようになった。

内容は主にIS訓練時での僕の動き方の事だ。どうにも僕は自分でも気付いていない癖があるらしく、彼女にはその癖を直す手伝いをしてもらったりしている。

では他の皆とも関係は回復したのか？というとなんかそうじゃない。今でも僕とシエル（打鉄の仮名）以外の人には冷たく当たっている。特に一夏とその周りのメンバーへの当たりは一番強い。

それと漸く分かったのはラウラさんは皆の雰囲気嫌いなのだろう。皆は（一夏と周りのメンバーはよくわからない）ISをオシヤレかスポーツ用品としか思っていない時がたまにある。きつとラウラさんは兵器としての面を知っている為に皆のISの緩い認識が許せないのかもしれない。

その点僕は兵器としての面をこの目で見ていて、実際に経験済みだから少しだけ皆と意識が違う。そこが僕にラウラさんが声を掛けてくる切っ掛けになったのだと思う。

僕としては皆とも仲良くしてほしいと思ってるけど、その反面ラウラさんの本格的な指導を受ける時間が減るので何とも言えない気持ちだったりする。軍隊の訓練方なんて滅多に経験出来ることでもないし、その経験は絶対に僕の助けになる筈だ。

それとシエル（以降は打鉄をシエルと呼ぶことにした）の感じた違和感を束さんに報告しておいた。どうやらドイツは前から後ろめたい事をやって来ていたらしく、束さんも目をつけていたとのこと。あの人の能力ならさして時間も掛からずに違和感の正体が掴める……筈。

ラウラさんのこともそうだけど、ついでとばかりに束さんからシャルルさんの話を聞いた。

何でもデユノア社は現在ISの第三世代機を作れずに経営難に悩まされているらしく、シャルルさんは一夏の戦闘データ等を盗む為の

人員として送り込まれたらしい。

しかも予想通り性別を偽って、だ。これがバレたら彼女の立場は一気に地に落ちるだろう。まさに博打だ。

正直シャルルさんに関してはどうするかは何も考えついていない。でもそろそろバックに協力者が欲しいところでもある。東さんは勿論強力と言って良いほどのバックだけど、何をするにしても目立ちすぎってしまう。その点会社の一つ二つがバックについてくれれば多少なりとも政府からの無駄な脅しに晒されなくて済む筈だ。

目をつけられる最大の理由はきつと僕も一夏も何処の国にも属していないからだ。でも一夏の白式の事を考えると彼は将来的に日本に所属する可能性が高い。そうなると僕は必要ない訳で、モルモットにされる可能性が凄まじく高い。いや僕だけなら良い。もし母さんやシエルにまで魔の手が伸びるのなら何としてでも阻止しなければならぬ。特にシエルはIS史上2番目くらいのブラックボックスになっている可能性がある（擬人化してるくらいだし。でも一番はやっぱり白騎士だろう）ので余計心配だ。

なら一番手っ取り早いのは何処かの国の代表候補生として所属することだろう。何処の国も世界に二人しかいない男性パイロットの一人の所属を断ることはないと思う。そして現場一番取り入りやすいのはデュノア社だ。シャルルさんの性別を偽らせてまで一夏の戦闘データを欲しがったんだし、一夏程では無いにせよ僕でもある程度の戦闘データの収集は可能だろう。問題は一夏じゃないと受け入れないという話だったら面倒くさいという点か。

……なにせよ、一度シャルルさんとしつかり話しておく必要がありそうだ。

それぞれの想い、迷い、不安

コンソールを叩く彼女の手からは怒りが見える。

ドイツの軍事情報を根刮ぎ洗い出した彼女——篠ノ之東は軍事機密の内容を読んで怒りを露にしていたのだ。

「別に試験管ベビーとかへんてこな目とかどうでも良いけどさあ。私の可愛い子供になんて汚物を混入させてくれちゃってるんだろねえ！」

切っ掛けは衛からの報告であった。打鉄がドイツ人のISから違和感を感じたらしいから一応調べて欲しいという電話だった。衛からのお願いだったのと我が子同然のISから違和感を感じたという情報を受けた東に断る理由はなかったので、即OKを出して調べ始めたのだ。

そして出るわ出るわドイツのヤバイ裏事情。

正直これら全てを向こうに叩きつければドイツは大打撃を受けるだろう。しかしそれだけでは東にとって面白くはない。

「あつ、そうだ♪どうせなら貰えるものもらっちゃおつと♪」

先程とは心機一転、ニコニコと楽しそうに次々とハッキングを仕掛けていく東。その脳裏に写るのは恥ずかしそうに顔を真っ赤にして照れていた少年の顔だった。

「んふふー、喜んでくれるかなあ」

可愛らしい笑顔でもやっている事はドイツを追い詰めているだけの東であった。そしてその魔の手は止まることを知らない。

「後フランスのデユノア社だっけ？あれも調べておかないとね。どうせセコいやり方でいっくんやまーくんのデータが欲しいだけだろうけどさ」

並列してデユノア社のシステムにもハッキングを仕掛けていく東。その機械的なウサギ耳は時折ピクピクと動いている。それは彼女の専用機が動いている事に他ならない。

「ほーほー、ふんふん？へー、向こうも必死みたいだね。馬鹿みたい。まあ東さんが天才過ぎるだけなんだけどね♪」



次々と現れる情報に高速かつ正確に目を通していく東は真正銘人間を止めていると言っても過言ではないだろう。しかし彼女のスベックの高さは何も情報戦だけではなかったりするが、それはまた別の話だ。

「さて、きつさと情報纏めてまーくんに褒めてもらおうと！」

彼女が何故ここまで衛に対して協力的なのか、東はまだその理由に気付く事はない。

---

小鳥遊 衛は不思議な奴だ。

初めに奴を見たときは特に何にも秀でている訳でもなければ特徴も少し女顔に見えなくもないくらいの、いつも特定の異性と一緒に行動しているだけのただの一般人という認識だった。

私はこの学園の誰も彼もが嫌いだ。

ISという兵器をまるでファクションのように何も考えずに扱う奴等を見て心底腹が立った。ここは教官がいるべき場所ではない、早くまたドイツに戻って欲しい、そう教官に詰め寄っても冷たくあしらわれるだけだった。それもこれも全てこの腑抜けた連中のせいだ。教官にあんな笑顔をさせた織斑一夏のせいだ。そう考えて苛立っていた。

そんなときに奴と、小鳥遊 衛と出会った。

いや、出会ったと言うよりも見つけたと言うべきか。

アリーナから聞こえてくる戦闘音に、誰が訓練しているのか少し気になった私はアリーナに顔を出した。何ならちよつかいすら出そうと考えていた。

しかしその気は直ぐに失せた。そこにいたのは訓練とは思えない程必死に訓練用攻撃ビットの攻撃から身を守っていた小鳥遊 衛の姿があった。

何の取り柄もない筈の、そこら辺の有象無象だと思っていた奴が滝のように汗を流しながら懸命にシールドを巧みに操り攻撃を受け

きっていたのだ。動きはまだまだだがその姿はまるで明確な何かと戦っているかのような、まるで命を掛けた戦いを経験した後のような、そんな感じの雰囲気は奴から感じたのだ。

私とて軍人、命のやりとりは既に経験しているし、気の持ち用も覚悟も違う。しかし奴は、小鳥遊 衛は軍人でも何でもない何処にでもいる一般人だった筈だ。

それが何故あんな雰囲気を出せる？

何故そんなにも視野を広く持てる？

何故そんなにも臆病に、かつ大胆に動ける？

その遠くを見通しているような奴の瞳に、私達が扱っているISという兵器をしっかりと理解している奴に興味を持ってしまふのは仕方なかった。だからこそ私は奴に接触することにした。

結果的に言えば善人、いやお人好しと言える奴だった。

無論ISである筈の打鉄が人間のような姿に、しかも小鳥遊 衛とずっと一緒に行動していた異性が実はISだったとは誰が思うだろうか。

そしてそれを為したのはかのISの生みの親、篠ノ之 東博士だという。つまり小鳥遊 衛は篠ノ之博士の関係者であるという事だ。上層部も博士の情報は欲しがっていたので奴から話を聞き出せるかと思っただが、奴はしっかりと断ってきた。どうやら口は堅い方らしい。私個人としては好ましい性格だ。

そしてもう一つ分かったのは、奴はこちらの気持ちを引き出すのが上手い。聞き上手と言うべきか。奴と話していると今まで荒れていた気分が落ち着くのが分かる。

それから私は奴に今までの経緯を話してしまった。

私にとつては辛い思い出、しかしラウラ・ボーデヴィツヒという存在を確立出来た大切な思い出のことを。

その間奴はずっと真剣に話を聞いてくれた。奴にとつては他人事なのに、まるで自分の事のように話を聞いてくれたのだ。

話を聞き終えた奴は私の事を凄いと言った。よく頑張ったと頭を撫でてきた。

私が経験したことのないことだった。こんなことで褒められたことなど今まで一度もなかった。

奴は私を尊敬すると言った。

分からない。奴が何故こんな私を尊敬したのか、理解出来なかった。しかし、それでも私は嬉しかった。

私が経験してきた事はなんら無駄ではないと肯定されているようで、多少なりとも心が救われた気がした。

そして最後に奴は、衛は私に知ってほしいことがあると言った。

『守る為の強さ』と『誰かを想う力』を知ってほしいと、それを一緒に探してほしいと言った。

私にはそれが分からない。衛も探していると言っていたが、奴はきつともう見つけているのだろう。だって私のように瞳が濁っていない。衛は既にそれを知っている筈だ。それでもきつと私に知ってほしいから、衛も手伝ってくれようとしているのかもしれない。

教官なら、分かるのだろうか？

あの日、教官と二人で話した時の教官の笑顔。あれも誰かを、いや、織斑 一夏を想って出たものなのだろう。

私にそれが見つけられるのだろうか。

結局私は答えを濁した。きつとこんな中途半端な気持ちで探せるようなものではない。

だからこそ、しっかり自分の中で答えを出してから答えたいと思う。それまでは待っていてもらうとしよう。

不思議と、奴と会って話すのが楽しみになっていた。

彼はお人好しだと最近思う。僕がこの学園に入学してから暫くするけど、彼は何かと僕のフォローに回ってくれている節がある。

入学して少ししか経っていないのに僕が男性じゃなくて女性だつて勘づいていたし、何ならストレートに聞かれもした。その時は何とか誤魔化せたと思ってた。けどそれは違った。

僕が一夏や衛の近くでやむを得なく着替えをしようとした時があった。あの時はISの訓練があったのにうっかりISスーツを着てくるのを忘れて焦っていた。僕が男性じゃなくて女性だってバレたら全てが終わりだ。だからこそ絶体絶命だって言うときに、衛は僕を背に隠しながら一夏の注意を僕から離すために一夏を連れて行ったりしてくれた。その時にチラリと視線が合ったので、衛が僕の正体に気付いているのは間違いなかった。

それから度々僕がポカをやらかしそうにする毎に衛は然り気無く僕の正体を守ってくれていた。性別を偽ってまでIS学園にやって来た不審者である筈の僕を、彼は何も言わずに助けてくれている。

どうしてそんなことをしてくれているのか僕には分からない。でも助かっているのは事実だし、日を追う毎に段々と衛に対して罪悪感が募っていった。でも何故か、罪悪感が募る反面そんな衛の行動にドキドキしている自分がいるのも確かだ。僕は衛に守ってもらって嬉しいと思ってしまうている。

でもそれは駄目だ。僕にそんな気持ちを感じる資格はない。僕の事を友達だと言ってくれる皆を騙し続けて、しかも一夏の戦闘データを盗もうとしているスパイなのだ。責められる事はあれど優しくされることはない。

僕は裏切り者だ。優しい皆を騙している悪人だ。法によって裁かれるべき犯罪者だ。

苦しい……心が悲鳴を上げている。

悲しい……夜な夜な涙が止まらない。

助けてほしい……優しい彼へと手を伸ばしたくなる。

こんなどうしようもない僕を……君は助けてくれるかな……

「助けて……衛……」

皆寝静まった夜。消え入るような細かい声で静かに、されどしつかり声に出す。

大丈夫。衛もシエルちゃんもぐっすり眠っている。だからこの声は誰にも届かない。

溢れた一筋の涙を指で拭い取り、瞳を閉じる。

今夜もきつと悪夢を見る。でもそれは仕方ない。それは僕が受けるべき罰なのだから。

「……………助けて、か」

## その手を伸ばせば

シャルルさんの眩きを偶々聞いてしまったあの日、僕はどうにも彼女を放っておけなくなつた。どうも僕は自分で思っているよりもお人好しなんだなあと理解した。

それに何だかんだでシャルルさんとは同室の馴染みもあり、普段よりも接する時間が長いこともあって大体の人となりが分かってきた。

シャルル・デュノアは根つからの善人だ。彼女は自分の行いが法に触れるものであるとしつかり理解しているし、いつもにこやかに表情を保つてはいるけど皆を騙している罪悪感に押し潰されそうになっている。

そんな彼女を助けたいと思うのは必然だったのかもしれない。だからこそ、僕は彼女と改めて話をしようと思う。

夜。シャルルさんに話があると持ち掛けてお互いのベッドの上で向かい合う。シエルは勿論僕の隣に座っている。ドアの鍵もしつかり掛けたので唐突な訪問者への対策も終えている。

「あの、話って何かな？」

「……正直に答えてほしい。シャルルさん、君は女の子だよね」

「っ、何を言ってるのさ？僕は男だよ？」

「お願いだ、シャルルさん。……もうそんな作り笑いは見たくないんだ」

「さっきから何を言ってるの？今日の衛はちよつとおかしいよ？」

シャルルさんはぎこちない笑顔で取り繕って誤魔化してくる。やっぱり正直には答えてくれない、か。

「……もう止めよう。君が一夏の戦闘データを盗もうとしていたのは分かってるんだ……」

「な……」

僕の告白にシャルルさんの顔が驚愕で染まる。そして徐々に青ざ

めていく。彼女にとってはバレてはいけない事だし、僕に知られてしまった以上彼女の運命は僕の手の中にある、と思われるだろう。

ここで取られる行動の候補は口封じの為に僕を制圧してくるか、同じように彼女も僕の弱味を握るか。そして彼女が取った行動は――

「そっ…か。やっぱりバレちゃってたんだ。そうだよ。衛は僕の性別がバレそうになる度に助けてくれてたもんね」

――全てを認めることだった。

「ズルで分かったようなものだよ。協力してくれた人がいたからね。でも僕はシャルルさんから直接聞きたい。一体何があつたのか、教えてほしい」

「……いいよ。むしろ聞いてほしいな、衛に……」  
ゆつくりとシャルルさんは話し始めてくれた。

彼女の両親のこと、彼女が妾の子であること、父親とは疎遠であること、母親亡き今は何処にも居場所がないこと、父親の命令で名前と性別を偽り一夏の戦闘データを盗もうとしたこと、そして仲良くしてくれる皆を騙している罪悪感に苛まれていること。

まるで己の罪を懺悔するかのように次々と溢れ出す言葉に、僕は心が苦しくなった。シエルに至っては目に涙を浮かべている。

「……これが全部だよ。僕はずっと皆を騙してきた。何もかもを偽って、ヘラヘラ笑って、自分の罪に見向きもしようとせずに……」  
「……ありがとう、シャルルさん。君にとって辛い事を聞いてごめんね」

「ううん、いいんだよ。衛には沢山助けてもらったから」  
そんなことはない。僕は君を助けられてなんかいない。  
だって君はそんなに辛そうな顔をしてるじゃないか。

思わずギリッと小さく歯軋りを立ててしまう。これから僕が言おうとしていることも偽善であると理解している。それでも僕は、彼女

へ手を差し伸べたい。

「シャルルさん。僕は君を助けたい」

「……え？」

「勿論僕なんかの力じゃ出来ることなんて殆ど無い。でも、それでも君の苦しみを少しでも軽くしてあげたいんだ。それに、何でか分からないけど……ここで何かを間違えたらきつと取り返しのつかないことになる。そんな気がする」

「言うなれば直感。けれど無視をしてはいけない、そんな感じがするのだ。」

「一人じゃ重くて辛いなら僕も一緒に持つよ」

立ち上がって笑顔で手を差し伸べる。勿論生半可な覚悟で言っている訳じゃない。彼女の話を聞いて改めて強く思ったのだ。この孤独な女の子の力になってあげたいと。

「……どう、して……」

そんな僕にシャルルさんは震えた声で小さく呟いていく。

「……どうして……こんな僕に手を伸ばしてくれるの……？」

その問いは彼女の心からの言葉。ずっと迷惑をかけて、ずっと知らぬ顔で頼り続けて隠してきた自分へ何故、と。

「そんなの簡単さ。泣いてる友達の手になりたい。それだけだよ」

「……ズルいよ。今そんなこと言われたら、本当に助けてほしくなっちゃうよ……手を……伸ばしたくなっちゃうよお……」

シャルルさんは泣きながら、おずおずと行き場を探すように手を伸ばし始める。まるで迷子の子供が母親を探すように。けれど罪悪感故か戻そうとした彼女の手を僕から掴んで引き寄せる。

「あっ……」

「大丈夫。僕は君を見捨てない。僕は君の力になるよ、シャルル。君はもう一人なんかじゃないんだ」

「……う……あ……ああ……うああ……！」

「よく頑張ったね。君は凄いよ、シャルル」

「うああああ……！！」

抱き寄せて安心させるように背中をポンポンと軽く叩いてあげる



と、彼女はとうとう耐えきれなくなり僕の胸元に顔を埋めながら声を  
押し殺して泣き始めた。そうとう溜め込んでいたんだろう。味方な  
んでいない状態で彼女はここまでやって来たんだ。溜め込んでし  
まっけていてもおかしくはない。

「今は好きだけ泣いて良いからね。落ち着くまでこうしてあげるか  
ら……」

「あああああ……!」

この日、シャルル・デユノアが心に塞ぎ止めていた苦しみは解放さ  
れ、彼女は本当の意味で仲間を得ることが出来たのだった。